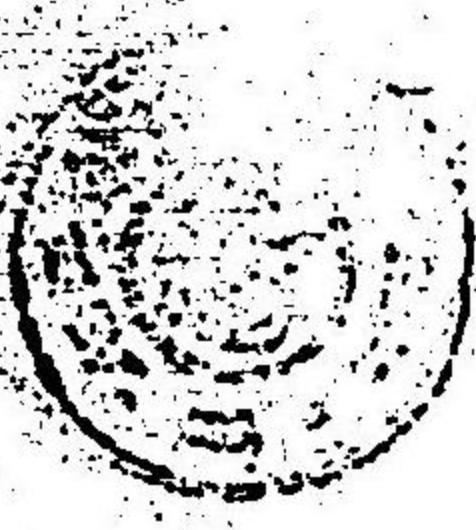
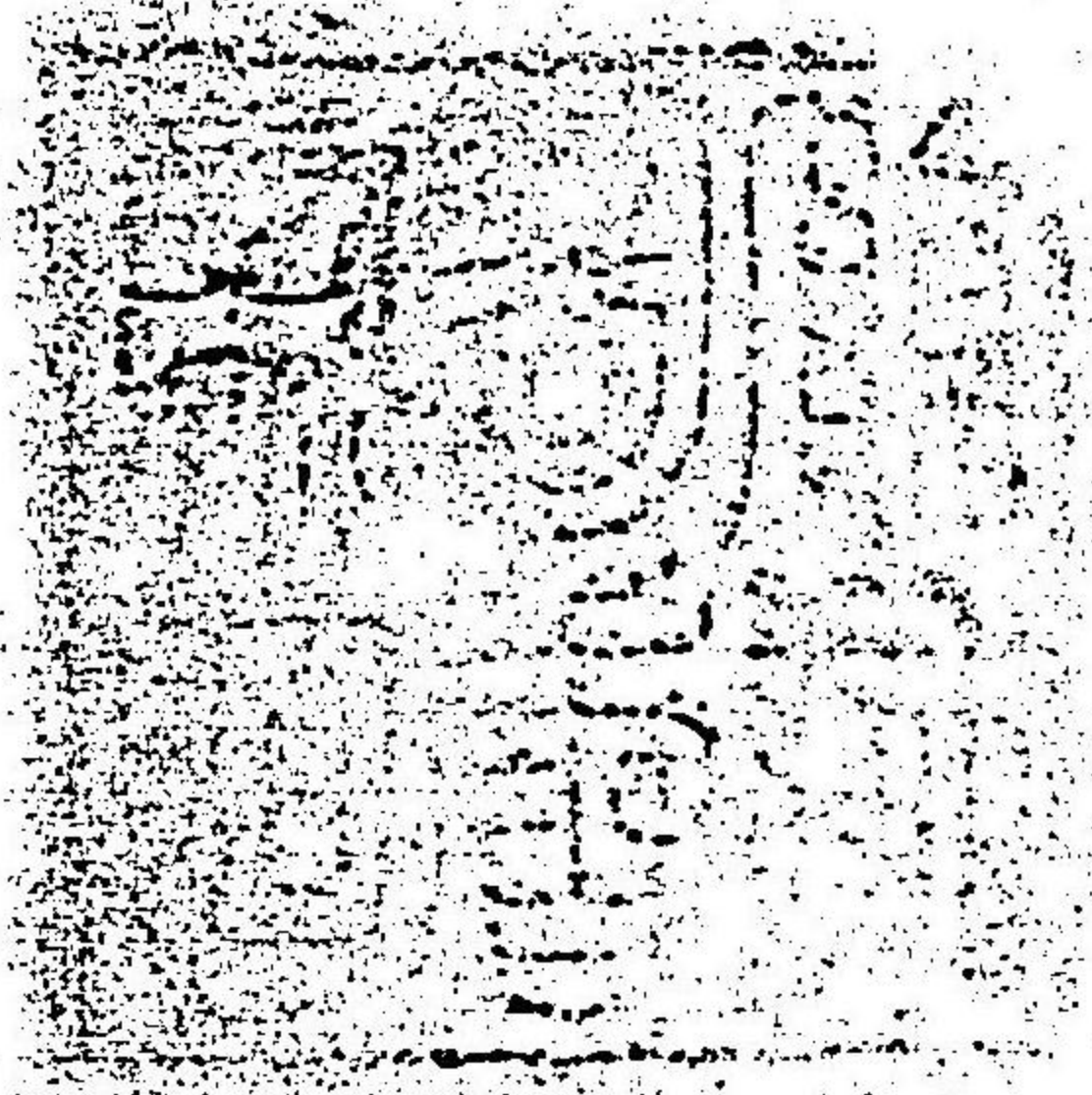


3  
6

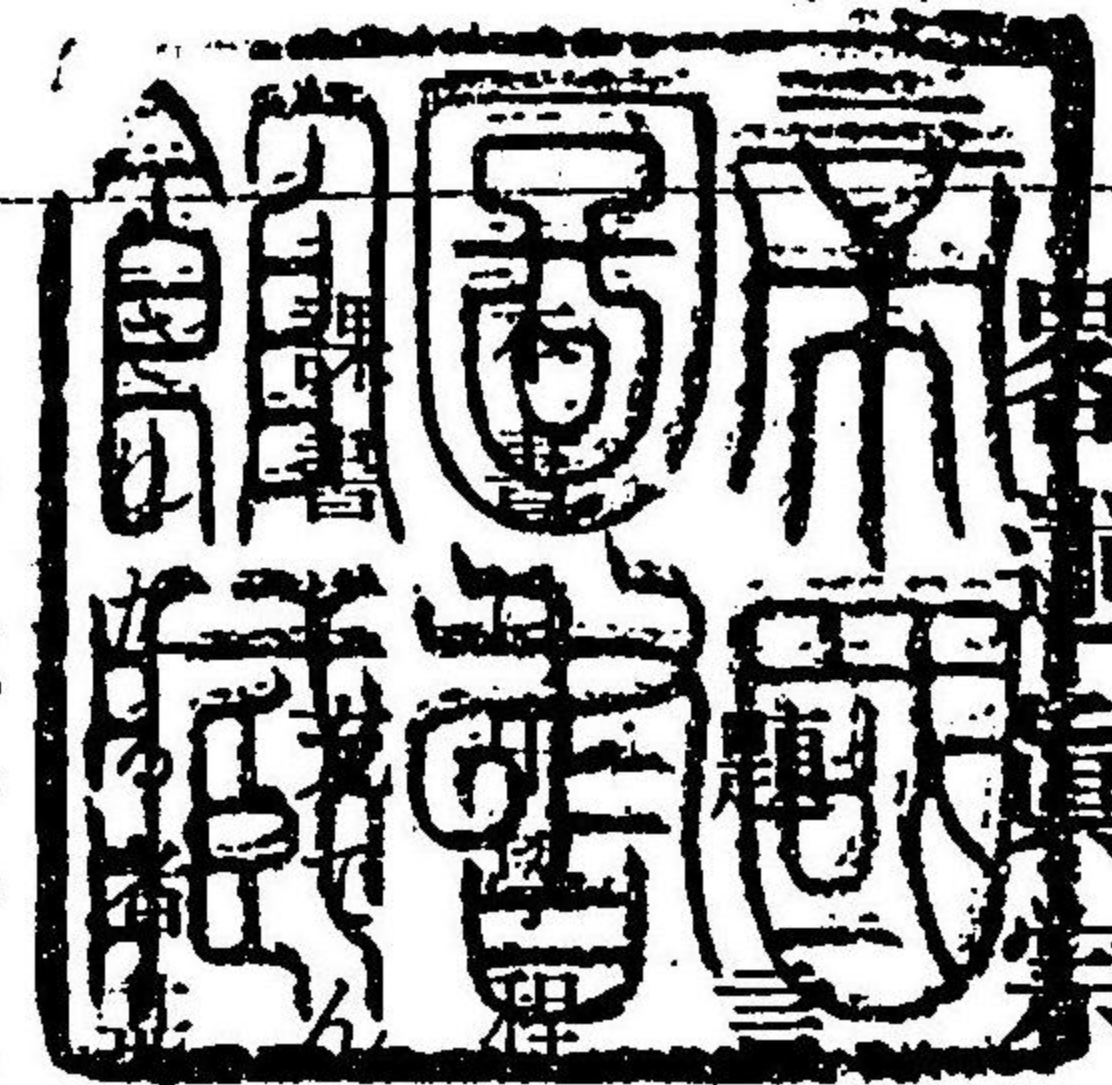
前田慧雲  
花田凌雲  
合著

略述真宗教史  
前編

東京  
文明堂



真宗 教史 前編



度の佛教學校に於ける真宗々學初歩の教  
が爲に成れり、由來佛教教課書として編纂  
だ少なく、唯僅かに一二の佛教々史の類あ  
るのみ、しかも學課程程度修業年限の配當、各特殊の事情あ  
ればこれとても直ちに取以て實地に用ゆべからざ  
るものあり、今や教課書須要を呼ぶの輩は益高くして、之  
に應ずべきの書全く欠乏す、佛教々育上の欠點何者か之  
に加かんや、これ予輩同志が奮つて微力を此に致す所以  
なり、予輩の企畫は、五ヶ年の修學年限を以て、宗餘乘の一  
班を授くるため各級に對して各一冊宛を供給せんこと

題言

を期す、本書その宗學部の第一冊なり。

予輩は此に本書編纂に就て取りし用意を告白し、教授諸氏の注意を請はざるを得ず。

一 宗學の初步に於て教史體の教授を取るの必要はこれ宗學研究の豫備に供するにあり、略して各師發揮の序次を察し、傍當代教界に於ける念佛者の思潮を知るは他日正確なる教義の解釋力を得るの基礎なりと信ず、國體を知らんと欲せば必ず先づ國史を知るを要す、宗學の事亦然らずんば非ず。

二 各祖の紀傳を教授するには、須く學生をして其人格に敬慕する所あらむを要す、嘗に其の教義を究むるも、嘗てその人格の如何に留意せざるが如きは、各祖を知るに於て、甚だ憾なき能はず、これ本書が割合に紀傳に

詳細を求めし所以なり、然れども僅々の紙數割愛の止むを得ざる少なからず、教授の任に當る人、よりて以て大に敷演する所あらば幸なり。

三 七祖の教義紀傳を叙述するに成るべく和讃正信偈を經緯としたるは、固より高祖の指南に仰ぐ所以なり、と雖も、また學生をして是等章句の大意を了知せしむるは、最も必要なる條件なりと信ずればなり。

四 要文拔萃の一段を加へたるは、經論釋の要文に誦習せしめんが爲なり、由來宗學教授に三經七祖句讀の一篇ありき、これ固より宗徒として、また宗學の初步として、須要なり、然れども僅少の時間のほか宗學に頒ち得ざる今日の課程に在りては、かゝる大部の句讀を終了せんことは決して望み難し、且つまた全部を終了したればこそ

四  
必ずしも誦習し得る者に非れば、本書は最も樞要なる文段を摘舉して句讀に供す、本學年の程度に在りては句讀を以て充分なりと信す。是等要文の義旨を講授するが如きは、時間の餘裕も無く、また順序を失する者なり、教授の任に當る人、必ず多きを初學者に望むなからんことを乞ふ。

五  
本書に於ける假名交りの本文は、成るべく注意して平易を主としたりと雖も、苟くも教義の叙途に亘るの處に於ては他日専門研究の地盤を作らんが爲めに往々専門術語を用ゆ故に甚だ難澁の跡なきに非ず、然るに實地教授に際しては、唯僅かに大躰の語意を講授し、所謂字義異釋等の詳細を避けんことを望む例へば難行の術語に對し、直ちに難に三難の條件を講じ、行に造作進趣の解

釋を授くるが如きは、上級に進みし後に譲りて可なるべし、若し此の如き講授に亘るときは十數首の和讃も以て一學年の教課として餘裕あり、何ぞ本書の如き内包を講了すべけんや、加之、未だ之に堪ゆるの準備をも與えずして直ちに詳細委曲に入らしめんとするは、教授上の一大拙策にして、勞多くして得る所少なく、學者の興味を減殺して、且つ動もすれば曲解附會の弊を養ふ者なり、宗學専門の學庭に於て既に然り、況んや普通學兼修の學校に於てをや、これ予輩がかへすべくも、教授當局者の注意を請ふ所以なり。

六  
前述の如針によりて、本文中に引用せる和讃、正信偈の章段は、これまたその大意を講授するを以て程度となさんことを望む、正信偈の如き和讃の如き幾多の深義

を短句中に該攝せる者なれば、その大意を略説すること  
も亦甚だ困難を感ずることなりと雖も、字句の詳釋を避  
け、唯文法の梗概を提示することは必ずしも難きに非ら  
ざるべし、故に樞要欠くべからずと認めし者も、字句の難  
解に亘るを避けて、多く之を割愛せり、要するに一學年中  
に本書一冊を講了し得るだけの程度にて可なるべし。  
七 本書が一般念佛教史に亘らざりしは、これ初步宗  
學者をして徒らに混雜に陥らざらむんと欲すればな  
り、且つ一般念佛教史を研究することは、眞宗としての教  
義に一應通曉したる後に於てすべき順序なり、淨土教史  
の通論は高等中學以上の課程たるべしと信す。  
八 行文用語等に於ては聊意を注かざるには非ざり  
しと雖も、匆忙の際、甚だ杜撰に亘りし點も多かるべく且

つ學生讀書力との並行果して其當を得たるや否や、是等  
は殊に教授當局者の注意を望む。  
以上の諸點は、本書によりて教授せらるゝ諸氏に對する  
著述者の希望を告白したるものなり、其他必ずしも此に  
言ふべきなし、要するに一に教授者運用の妙に依頼する  
のみ、著者用意の到らざるもの蓋し多からん、江湖の諸賢  
希くは教へよ。

明治三十五年四月

著 者 識

畧述真宗教史前編目次

總論

第一章	真宗宗名并に大旨	一
第二章	正依三經	二
	大無量壽經	
	大旨	七
	要文摘萃	一一
二	觀無量壽經	
	大旨	一八
	要文摘萃	二一
三	阿彌陀經	
	大旨	二五
	要文摘萃	二六
第三章	七祖選定	二八

別論

第一章 龍樹菩薩

第一節 龍樹菩薩以前の淨土教……………三五

第二節 龍樹菩薩の傳……………三七

第三節 龍樹菩薩の教義……………

大旨……………三九

要文摘萃……………四五

第四節 龍樹菩薩同時代の他師の淨土教……………四六

第二章 天親菩薩

第一節 天親菩薩の傳……………四八

第二節 天親菩薩の教義……………

大旨……………五〇

要文摘萃……………五七

第三節 天親菩薩已後の淨土教……………六〇

第三章 曇鸞大師

第一節 曇鸞大師以前の念佛……………六二

第二節 曇鸞大師の傳……………六五

第三節 曇鸞大師の教義……………

大旨……………七〇

要文摘萃……………七八

第四章 道綽禪師

第一節 道綽禪師以前及同時諸師の淨土教……………九一

第二節 道綽禪師の傳……………九三

第三節 道綽禪師の教義……………

大旨……………九五

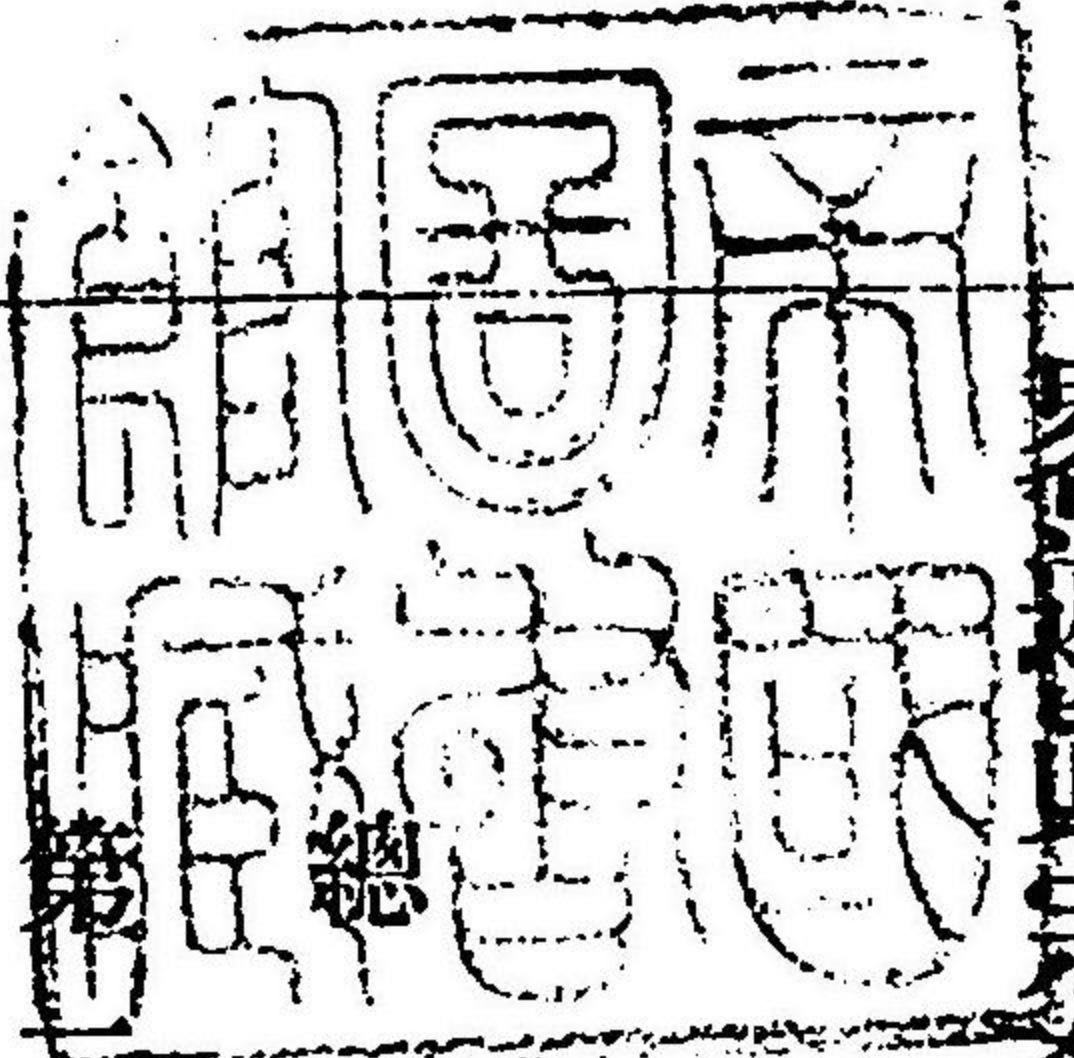
要文摘萃……………一〇〇

第五章 善導大師

第一節 善導大師の傳……………一〇八

第二節 善導大師の教義……………

大旨	一一二
要文抜萃	一二四
第三章 善導大師以後の淨土教	一四〇
第六章 源信僧都	
第一節 源信僧都以前の念佛	一四五
第二節 源信僧都の傳	一五六
第三節 源信僧都の教義	一六〇
大旨	一六六
要文抜萃	一七八
第七章 源空上人	
第一節 源空上人以前の念佛	一七五
第二節 源空上人の傳	一七五
第三節 源空上人の教義	一七七
大旨	一九〇
要文抜萃	一九〇
已上	



畧述眞宗教史 前編

論

第一章 眞宗の宗名并に大旨

前田 慧雲  
花田 凌雲  
合著

宗名

眞宗とは具には淨土眞宗と云ひ、淨土亦具には往生淨土と云ふ、阿彌陀佛の本願、即ち他力に因り、淨土に往生して證果を開くべき法門の謂なり、而して往生淨土の法門に、方便教として聖道門より淨土門に入る過渡たる所の半他力教と眞實教として阿彌陀佛本願の實義たる純他力教との二種あり、今はその眞實の方なるが故に淨土眞宗と云



大旨

ふ、即ち往生浄土の眞實法門を弘通する宗旨と謂へる意義なり。

抑眞宗教義の大旨は如何にといふに、惠燈大師の「領解文」は最も簡単に、之を説明せられたり。曰はく  
もろもろの雜行雜修自力のこゝろをふりすて、一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生御たすけさふらへとたのみまうしてさふらふ、たのむ一念のとき往生一定御たすけ治定とぞんじ。このうへの稱名は御恩報謝とぞんじよろこびまうし候。この御ことはり聽聞まうしわけさふらふこそ、御開山聖人御出世の御恩、次第相承の善知識のあさからざる御勸化の御恩と、ありがたくぞんじ候。このうへはさだめおかせらるゝ御おきて一期をかぎりまもりまうすへく候。

略して此の意を解釋せば、この中四段に分つべし、一に初より「治定とぞんじ」までは信心を述べ、二に「このうへの稱名は以下は報謝をあかし、三に「この御ことはり以下は師徳を説く、已上三段は眞諦なり、四に「このうへは以下は俗諦の守るべきを教へられたり。「もろもろの雜行雜修自力のこゝろ」とは、これ眞宗安心には必ず捨て離れざるべからざるものを擧げたるなり、即ち種々の行業を勵みて浄土に回向し、若しくは現世の祈願をこらすが如き自力の心行は總べて之を雜行雜修と名く、是等自力の行ひと心とを捨て、全く阿彌陀如來の勅命に歸順して死後の大事を他力に托し奉つる心相を「御たすけさふらへとたのむ」と謂ふ、即ち他力の信心なり、この信心決定の一念に往生は定まるなり。信心すでに定まりぬれば佛恩の廣大

なることを思ひて、常に報謝のために稱名せざるべからず、これを眞宗の報謝行とす、所謂信心正因稱名報恩とは是なり。然るに今日の我等、容易にかゝる妙法を聞くことを得るは皆是れ開祖以下相承の善知識の恩致なれば、末徒たるものは常に之を忘るべからず。さて此の如く内に向て佛恩師恩を信奉する者は、必ず外に向て人倫道徳の行爲を全ふし、善良なる生活を遂げざるべからず、これ所謂俗諦門なり。かく『領解文』は、その言、簡單なりと雖も、四個の條件を以て眞俗二諦の主旨を示されたるが、眞宗の教義はその要、此の外に出でざるなり。夫れ、眞俗二諦の教義は全く、三經の金言七祖の論釋を相承したるものなれば、高祖大師は愚禿弘むる所更に私なしと曰へり、然るに宗旨の風儀は在家示同として肉食妻帶

し、他の聖道諸宗と全く其趣を異にせり、蓋しこれ則を聖徳太子に取りたるものなり。

### 第一章 正依三經

正依の三經とは『大無量壽經』『觀無量壽經』『阿彌陀經』是なり、此三經に異譯の本あり。中に就て『大經』には總て十二種ありて、五種は現存し、他の七種は闕亡せしかば、之を五存七欠と稱す、五存の本は左の如し。

無量清淨平等覺經四卷 後漢支婁讖譯

阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經二卷 吳支謙譯

無量壽經二卷 魏康僧鎧譯

無量壽如來會二卷 唐菩提留支譯

### 三經の異譯

大乘無量壽莊嚴經三卷

宋法賢譯

此の中第三の康僧鎧譯無量壽經を眞宗依用の本とす。『觀經』には三種の異譯あり、今は宋蓋良耶舍の譯本『觀無量壽經』のみ現存せり、眞宗依用の本は是なり。『阿彌陀經』に二種あり、

阿彌陀經一卷

姚秦羅什三藏譯

稱讚淨土佛攝受經一卷

唐玄奘三藏譯

眞宗には羅什の譯本を用ゆるなり。

此の三經は並に眞宗正依の經典なれども『觀經』と『小經』とは隱顯兩説として經文の表面に顯はれたる意と、又裏面に隱れたる意との二様あり、其の顯説の方は淨土の方便教にして隱説は眞實教なり。今且く隱説の意に依て其の大要を述へん。

無量壽經大旨

(一) 無量壽經

此の經は釋尊が大寂定に入りて、本佛彌陀の威相を現して、出世の本懷たる他力法門を説かれたるものなり。一經大に分ちて二段とす、一に彌陀願力分、二に釋迦勸誠分なり。

彌陀願力分

彌陀願力分の大意は彌陀成佛の因果と衆生往生の因果とを説て、而して衆生往生の因果は全く彌陀の願力によりて成就せられたる旨を顯すに在り。今其の要を摘て之を言はゞ、先づ彌陀成佛の因とは、法藏菩薩が世自在王如來といへる師佛の所に於て、他力攝取の本願を發起し、此の本願を成就せんが爲に悠久の時劫萬行を積修せられしこと是なり。所謂他力攝取の本願とは四十八種あり、その中第十八願を主要とす、其の文に曰はく、

彌陀成佛の因

八  
設ひ我佛を得んに、十方衆生至心信樂して、我國に生れんと欲し、乃至十念せん、若し生れずば正覺を取らじ、唯五逆と正法を誹謗せん者を除く、云。

この文意は十方の衆生、その機の善惡賢愚を問はず、若し能く願力の道理を聞きて、その實義の如く、自心を忘れ願力に一致し、往生を願樂するものは、必ず之を攝取して我淨土に往生し、佛果を得しめん、この事若し成就せずんば我も亦佛とはならじ、但佛法を誹謗し、又は極大の罪惡を犯しつゝあるものは、願力を聞受すること能はざるか故に、且く之を除く、若し其の罪を懺悔して、能く願力を聞受するに至らば、亦之を攝取すべしとなり。次に彌陀成佛の果は法藏菩薩の願行成就して阿彌陀佛とならせ給ひて淨土を西方に示現し、其の名號を十方に流布して以

彌陀成佛の果

て衆生をして、名號の實義を聞信し、之に由りて淨土に往生せしむる者是なり。經文この彌陀の果を説く中に於て衆生往生の因果を明せり、その因とは諸佛稱讚の名號を聞きて信心歡喜する是なり、その果は淨土に往生して佛果を得る是なり、此の如く衆生往生の因果を彌陀の果中に於て明すものは、其の意、衆生往生の因果は共に彌陀の願力に因て成就せらるゝ旨を顯はすに在り、苟くも衆生往生の因果、共に彌陀の果力に因て成就せらるゝものなるときは、全くこれ他力なること昭晰見るべし、故に彌陀願力分の大意は終に他力といへる二字を以て、之を蔽ひ盡すことを得べく、他力是れ即ち眞宗の教體なり。釋迦勸誠分の大意は、信心の衆生にして、若し罪惡を造るときは佛陀の願力をして塞て通せざらしむることを致

釋迦勸誠分

す故に、常に勉めて善を修して以て願力の弘通を扶助せ  
ざるへからず、然りと雖も、その修する所の善行を往生の  
因に擬することあらば之を不了佛智と名く、不了佛智は  
眞實の淨土に往生することを得ず、故に須く佛智を明信  
すへしと勸誡するに在り。而して惡には五惡を説き、善  
にも亦五善を説く、五惡とは、不仁、不義、不禮、不信、不智なり、  
五善は之に反す、知るべし、蓋し五惡を誡め五善を勸むる  
は即ち世間の道德を教ふる者にして、所謂仁義爲先とい  
へる俗諦門なり、而して五善を以て往生の因に擬せんこ  
するを不了佛智なりと誡むるは、信心正因起行報恩の道  
理にして、即ち出世間法なる眞諦門なり、故に釋迦勸誡分  
の大意は眞俗二諦に在りて、眞宗の法門は此に淵源せり。

要文拔萃

如來以無蓋大悲矜哀三界所以出興於世光闡道教欲拯  
群萌惠以眞實之利無量億劫難值難見猶靈瑞華時時乃  
出。

大經要文

時彼比丘聞佛所說嚴淨國土皆悉親見超發無上殊勝之  
願其心寂靜志無所著一切世間無能及者具足五劫思惟  
攝取莊嚴佛國清淨之行。

設我得佛國中人不往定聚必至滅度者不取正覺(第一願)

設我得佛光明有能限量下至不照百千億那由他諸佛國  
者不取正覺(第二願)

設我得佛壽命有能限量下至百千億那由他諸佛國

者不取正覺(第三願)

設我得佛十方世界無量諸佛不悉咨嗟稱我名者不取正

覺(第七願)

設我得佛、十方衆生至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除五逆、誹謗正法。(第八願)  
設我得佛、十方衆生發菩提心、修諸功德、至心發願、欲生我國、臨壽終時、假令不與大衆圍繞、現其人前者、不取正覺。(第九願)

設我得佛、十方衆生聞我名號、係念我國、植諸德本、至心迴向、欲生我國、不果遂者、不取正覺。(第十願)  
設我得佛、他方佛土諸菩薩衆、來生我國、究竟必至一生補處、除其本願自在所化、爲衆生故、被弘誓鎧、積累德本、度脫一切遊諸佛國、修諸菩薩行、供養十方諸佛、如來開化、恒沙無量衆生、使立無上正眞之道、超出常倫、諸地之行、現前修習普賢之德、若不爾者、不取正覺。(第十一願)

設我得佛、十方無量不可思議諸佛世界、其有女人聞我名字、歡喜信樂、發菩提心、厭惡女身、壽終之後、復爲女像者、不取正覺。(第十二願)

我建超世願、必至無上道、斯願不滿足、誓不成正覺。  
我於無量劫、不爲大施主、普濟諸貧苦、誓不成正覺。  
我至成佛道、名聲超十方、究竟靡所聞、誓不成正覺。  
(第十三願)

是故無量壽佛號無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、燄王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛、其有衆生遇斯光者、三垢消滅、身意柔輒、歡喜踊躍、善心生焉、若在三塗勤苦之處、見此光明、皆得休息、無復苦惱、壽終之後、皆蒙解脫。  
佛告阿難、其有衆生、生彼國者、皆悉住於正定之聚、所以者

何彼佛國中無諸邪聚及不定聚(願成就十一)十方恒沙諸佛如來皆共讚嘆無量壽佛威神功德不可思議(願成就十七)諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心回向願生彼國即得往生住不退轉唯除五逆誹謗正法(願成就十八)佛告阿難十方世界諸天人民其有至心願生彼國凡有三輩其上輩者捨家棄欲而作沙門發菩提心一向專念無量壽佛修諸功德願生彼國此等衆生臨壽終時無量壽佛與諸大衆現其人前即隨彼佛往生其國便於七寶華中自然化生住不退轉智慧勇猛神通自在是故阿難其有衆生欲於今世見無量壽佛應發無上菩提之心修行功德願生彼國

佛告阿難其中輩者十方世界諸天人民其有至心願生彼國雖不能行作沙門大修功德當發無上菩提之心一向專念無量壽佛多少修善奉持齋戒起立塔像飯食沙門懸緝然燈散華燒香以此迴向願生彼國其人臨終無量壽佛化現其身光明相好具如眞佛與諸大衆現其人前即隨化佛往生彼國住不退轉功德智慧次如上輩者也

佛告阿難其下輩者十方世界諸天人民其有至心欲生彼國假使不能作諸功德當發無上菩提之心一向專意乃至十念念無量壽佛願生彼國若聞深法歡喜信樂不生疑惑乃至一念念於彼佛以至誠心願生其國此人臨終夢見彼佛亦得往生功德智慧次如中輩者也(已上文)

其佛本願力聞名欲往生皆悉到彼國自致不退轉世間人民父子兄弟夫婦家室中外親屬當相敬愛無相憎嫉有無相通無得貪惜言色常和莫相違戾我今語汝世間之事人用是故坐不得道當熟思計遠離衆

十六  
惡擇其善者勤而行之愛欲榮華不可常保皆當別離無可樂者曼佛在世當勤精進其有至心願生安樂國者可得智慧明達功德殊勝勿得隨心所欲虧負經戒在人後也汝今亦可自厭生死老病痛苦惡露不淨無可樂者宜自決斷端身正行益作諸善修已潔體洗除心垢言行忠信表裏相應人能自度轉相拯濟精明求願積累善本雖一世勤苦須叟之間後生無量壽佛國快樂無極長與道德合明永拔生死根本無復貪恚愚痴苦惱之患欲壽一劫百劫千萬億劫自在隨意皆可得之無爲自然次於泥洹之道天地之間五道分明恢廓窈窕浩浩茫茫善惡報應禍福相承身自當之無誰代者數之自然應其所行殃咎追命無得縱捨善人行善從樂入樂從明入明惡人行惡從苦入苦從冥入冥誰能知者獨佛知耳教語開示信用者少生死不休

惡道不絕如是世人難可具盡故有自然三塗無量苦惱展轉其中世世累劫無有出期難得解脫痛不可言是爲五大惡五痛五燒勤苦如是譬如大火焚燒人身人能於中一心制意端身正念言行相副所作至誠所語如語心口不轉獨作諸善不爲衆惡者身獨度脫獲其福德度世上天泥洹之道

吾語汝等是世五惡勤苦若此五痛五燒展轉相生但作衆惡不修善本皆悉自然入諸惡趣或其今世先被殃病求死不得求生不得罪惡所招示衆見之身死隨行入三惡道苦毒無量自相焦然至其久後共作怨結從小微起遂成大惡皆由貪著財色不能施惠癡欲所迫隨心思想煩惱結縛無有解已厚已諍利無所省錄富貴榮華當時快意不能忍辱不務修善威勢無幾隨以磨滅身坐勞苦久後大劇天道施



張、自然糺舉綱紀羅網、上下相應熒熒忪忪、當入其中、古今有是痛哉可傷、佛語彌勒、世間如是、佛皆哀之、以威神力摧滅衆惡、悉令就善、棄捐所思、奉持經戒、受行道法、無所違失、終得度世泥洹之道。

佛語彌勒、其有得聞彼佛名號、歡喜踊躍、乃至一念、當知此人、爲得大利、則是具足無上功德、是故彌勒設有大火充滿三千大千世界、要當過此聞是經法、歡喜信樂、受持讀誦、如說修行。

(二) 觀無量壽經

觀經大旨

此經の大意は、當時印度の王舍城に頻婆沙羅王あり、王の夫人を韋提希と云ふ、この夫人、其の子阿闍世の爲に幽閉せられて、愁苦措く能はず、乃ち遙かに釋尊を禮して、その

來駕を請ひぬ、釋尊神通力を以て彼の閉室中に入り、自身の光明中に十方淨土を現して、夫人をして、その所好を擇ばしめけるに、夫人乃ち之を觀見して、阿彌陀佛の淨土に往生せんと欲することを啓白せり。此に於て釋尊願力の法門を弘通すへき機縁の熟するを察して、忽ち微笑を洩し、而して韋提希の爲に、初に定善を説き、次に更に散善を説きて、以て之を機の堪否に勘へ、終に念佛獨り定散諸行の利益する能はざる極惡の劣機を攝取して、往生せしめ得る勝徳あることを彰はし、定散諸行を廢して念佛一法を立せられり。

定善

更に定善散善の大要を述ふれば、初の定善とは、息慮凝心にて、心を靜めて、彼の淨土の三種の莊嚴を觀想するをいふ、三種の莊嚴とは、國土の莊嚴と主佛の莊嚴と聖衆の莊

散善

嚴となり、經には十三種に開説せり、その第七觀の初に當りて、釋尊夫人に向ひ、今汝が爲に苦惱を除くの法を説かんと、のたまひしとき、阿彌陀佛忽然として空中に現れたまひぬ、夫人之を見たてまつりて、爲に信心を獲て歡喜大悟せり。次に散善とは息慮凝心の工夫を要せず、廢、惡修善とて、諸の惡を廢して善を修するをいふ、散善に三福の業あり、一には父母に孝養し、師長に奉持し、慈心にして殺さず、十善業を修す、これは世間の善なり、二には三歸を受持し、衆戒を具足し、威儀を犯さず、これは小乗の善なり、三には菩提心を發し、深く因果を信じ、大乘を讀誦し、行者を勸進す、これは大乘の善なり、經には之を機類に配し、分ちて九品となせり、その上三品は大乘の機にして、大乘の善行、即ち第三福を修し、中上中下の二品は小乗の機にして

小乗の善行、即ち第二福を修し、中下品は世善の機にして世間の善行、即ち第一福を修して、以て往生の因に擬せり、而して下三品は共に衆惡を造りて慚愧することを知らざる罪人にして、大小乗及世間の善行を修し能はざる劣機を擧げ、かゝる劣機は唯念佛に因てのみ往生を得ることを示せり、是れ即ち念佛は最勝の法にして、且つ極めて修し易き行なれば、他の一切の善行に於て利益を被ること能はざる極惡の機をも攝取し得ることを顯すものなり、是に由りて結末に至りて他の定散の善行を廢して獨り念佛の一法を取りて阿難に付屬せられたるなり。

\*

\*

\*

\*

\*

觀經要文

要文拔萃

唯願世尊、爲我廣說無憂惱處、我當往生、不樂閻浮提濁惡

世也。此濁惡處。地獄餓鬼畜生盈滿。多不善聚。願我未來不聞惡聲。不見惡人。今向世尊。五體投地。求哀懺悔。唯願佛日。教我觀於清淨業處。爾時世尊。放眉間光。其光金色。徧照十方無量世界。還住佛頂。化爲金臺。如須彌山。十方諸佛淨妙國土。皆於中現。或有國土。七寶合成。復有國土。純是蓮華。復有國土。如自在天宮。復有國土。如玻璃鏡。十方國土。皆於中現。有如是等無量諸佛國土。嚴顯可觀。令韋提希見。時韋提希白佛言。世尊。是諸佛土。雖復清淨。皆有光明。我今樂生極樂世界阿彌陀佛所。唯願世尊。教我思惟。教我正受。佛告阿難及韋提希。諦聽諦聽。善思念之。佛當爲汝分別解說。除苦惱法。汝等憶持。廣爲大衆分別解說。是語時。無量壽佛。住立空中。觀世音大勢至。是二大士。侍立左右。光明熾盛。不可具見。百千閻浮檀光色。不得爲比。

一一光明徧照十方世界。念佛衆生攝取不捨。乃至以觀佛身故。亦見佛心。佛心者。大慈悲是。以無緣慈。攝諸衆生。佛告阿難。上品上生者。若有衆生。願生彼國者。發三種心。即便往生。何等爲三。一者至誠心。二者深心。三者迴向發願心。具三心者。必生彼國。佛告阿難。及韋提希。下品上生者。或有衆生。作衆惡業。雖不誹謗方等經典。如此愚人。多造衆惡。無有慚愧。命欲終時。遇善知識。爲讚大乘十二部經首題名字。以聞如是諸經名故。除卻千劫極重惡業。智者復教合掌叉手。稱南無阿彌陀佛。稱佛名故。除五十億劫生死之罪。爾時彼佛。即遣化佛化觀世音。化大勢至。至行者前。讚言善男子。汝稱佛名故。諸罪消滅。我來迎汝。作是語已。行者即見化佛光明。徧滿其室。見已歡喜。即便命終。乘寶蓮華。隨化佛後。生寶池中。經七七日。蓮

華乃敷、當華敷時、大悲觀世音及大勢至放大光明、住其人前、爲說甚深十二部經、聞已信解、發無上道心、經十小劫、具百法明門、得入初地、是名下品上生者、得聞佛名法名、及聞僧名、聞三寶名、即得往生。

佛告阿難及韋提希、下品下生者、或有衆生、作不善業、五逆十惡、具諸不善、如此愚人、以惡業故、應墮惡道、經歷多劫、受苦無窮、如此愚人、臨命終時、遇善知識、種々安慰、爲說妙法、教令念佛、此人苦逼、不遑念佛、善友告言、汝若不能念者、應稱無量壽佛、如是至心、令聲不絕、具足十念、稱南無阿彌陀佛、稱佛名故、於念念中、除八十億劫生死之罪、命終之時、見金蓮華、猶如日輪、住其人前、如一念頃、即得往生極樂世界、於蓮華中、滿十二大劫、蓮華方開、觀世音大勢至、以大悲音聲、爲其廣說諸法實相、除滅罪法、聞已歡喜、應時即發菩提

之心、是名下品下生者、是名下輩生想、名第十六觀。

若念佛者、當知此人、是人中分陀利華、觀世音菩薩大勢至菩薩、爲其勝友、當坐道場、生佛諸家。

佛告阿難、汝好持是語、持是語者、即是持無量壽佛名。

(三) 阿彌陀經

小經大旨

此の經の大意は唯多善根多福德なる念佛の一法のみありて能く五濁惡世の衆生を利益して極樂世界に往生して成佛の益を獲しむ、此の故に十方世界の諸佛如來皆悉く阿彌陀佛の不可思議功德を稱讚して、その利益の虚しからざることを證明せり、我が滅後の衆生は皆須く此の諸佛の證明せらるゝところの念佛を信じて往生を願ふべしと説示して、以て舍利弗に付囑せられしに在り。是

れ即ち釋尊の遺囑にして、二千餘年來三國の間に念佛の弘通するは此の遺囑の餘響なりと知るべし。

要文拔萃

小經要文

舍利弗、於汝意云何、彼佛何故號阿彌陀、舍利弗、彼佛光明無量、照十方國、無所障礙、是故號爲阿彌陀、又舍利弗、彼佛壽命、及其人民無量無邊阿僧祇劫、故名阿彌陀、舍利弗、不可以少善根福德因緣、得生彼國、舍利弗、若有善男子善女人、聞說阿彌陀佛、執持名號、若一日、若二日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不亂、其人臨命終時、阿彌陀佛與諸聖衆、現在其前、是人終時、心不顛倒、即得往生阿彌陀佛極樂國土、舍利弗、我見是利、故說此言、若有衆生、聞是說者、應當發願、生彼國土。

舍利弗、如我今者讚嘆阿彌陀佛、不可思議功德、東方亦有阿閼鞞佛、須彌相佛、大須彌佛、須彌光佛、妙音佛、如是等恒河沙數諸佛、各於其國、出廣長舌相、徧覆三千大千世界、說誠實言、汝等衆生、當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經。

舍利弗、於汝意云何、何故名爲一切諸佛所護念經、舍利弗、若有善男子善女人、聞是諸佛所說名及經名者、是諸善男子善女人、皆爲一切諸佛共所護念、皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提。

舍利弗、如我今者稱讚諸佛、不可思議功德、彼諸佛等、亦稱說我不可思議功德、而作是言、釋迦牟尼佛、能爲甚難希有之事、能於娑婆國土五濁惡世、劫濁見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁中、得阿耨多羅三藐三菩提、爲諸衆生說是一切世間難

信之法、舍利弗、當知我於五濁惡世、行此難事、得阿耨多羅三藐三菩提、爲一切世間、說此難信之法、是爲甚難。

### 第三章 七祖の選定

#### 七祖の選定

抑淨土念佛の教義は、源を佛説に發したれども、滅後數世紀の間は全く隠れたりしが、第五世紀以後大乘教の復興と共に印度の教界に出現し、當時有力なる諸大士の唱道する所となり、漸次一宗の教綱を發揮したり。而して滅後六世紀、佛教東漸して支那に入り、若々として移植に努めし後、第九世紀の後半に入りて、念佛の教義初めて唐土の民衆に傳はりぬ、爾後各宗の興起に伴はれ、殆んど宗派の境域を超えて諸高僧の奉持する所となり、唐初に至り

て最も隆運を極め、綿々として後世に流布せり。日本の淨土教義も亦佛滅後十一世紀佛教傳來の後久しからずして、その根芽を發せしが、十三世紀最澄弘法二大師の立宗以後に及びて愈々盛運に向ひ、天台の一門殊に多くの念佛者を出し、十七世紀源空上人の開宗に至りて、正に百花爛熳の盛況を示したり。我高祖は此時に生れて、その精華を摘み、異解僻説を斥けて此に淨土眞宗の一流を大成せられたり。流傳既に此の如く久しければ、此間に出でたる高僧名徳も少なからずと雖も、本宗の宗祖とする所は印度に在りては龍樹、天親の二菩薩、支那に在りては曇鸞、道綽、善導の三師、日本に在りては源信、源空の二師これなり、これを本宗の七祖と稱す。

選定の要件

何故に高祖は幾多の高僧中、僅かにこの七祖を取られしか、蓋しこれに三個の要件ありしか如し。一にはその師自身の信仰が純粹他力にして、化他も亦同じく然ること、二には著述の書ありて、しかもその中に説ける所の教義が純粹他力にして彌陀の願意に契ひたること、三には法門の發揮ありて一宗の綱格に資するものあること、これなり。『正信偈』に

印度西天之論家、中夏日域之高僧、顯大聖興世正意、明如來本誓應機。

と述せしは、この七祖選定の標準を示されたるものなり、凡そ淨土の教義を奉して西方願生を以て自行化他せられたる人々の中には、其の見解種々にして各自宗の教義に曲解し、未だ以て眞實弘願の佛意に達せざる者頗る多

七祖の著書

し、かゝる念佛者は如何に學識徳行の譽高くとも、取りて以て宗祖に奉ずべからざるは無論なり。七祖は此點に於て餘他の諸師に異り、一器瀉瓶の信心些少の誤謬なく純粹他力にして化他も亦専ら之を以てせられたり、是選定の第一由なり。然るに若し著述の書ありて、其中に専ら純粹他力の教義を説示したるものあるにあらざれば、その自信及化他が果して如何なりしかを明かに知るべからず、而して七祖は皆各著述あり。即ち龍樹菩薩には『十住毘婆沙論』あり、天親菩薩には『淨土論』あり、曇鸞大師には『淨土論註』あり、道綽禪師には『安樂集』あり、善導大師には『觀經四帖疏』、『淨土法事讚』、『觀念法門』、『往生禮讚』、『般舟讚』あり、源信僧都には『往生要集』あり、源空上人には『選擇本願念佛集』あり。孰れも

## 七祖の發揮

皆純粹他力の教義を紹述して以て彌陀の願意を開顯せり、是選定の第二由なり。然るにその著書中に説ける所の教義に於て一宗法門の發達に資すべきもの無くんば宗祖たるの資格なし、如何となれば、宗祖とは一宗がよりて以て立つべき教綱を求め得べき人々ならざるべからず、其他は前祖の教義を遵奉し開演するに過ぎざればなり。七祖は此點に於て亦諸師に異なり、各法門の發揮ありて、今日本宗の基礎を築かれたり、これ選定の第三由なり。如何なるかこれ七祖の發揮なる各祖に於て各その一を舉げて之を示すべし。初祖龍樹菩薩は『十住論易行品』に於て、難易二道の判擇ありて、一代の佛教に難行の道と易行の道との二種あることを示し、彌陀本願の念佛のみ是易行なることを説かれ

たり。天親菩薩は『淨土論』に於て一心五念の教義を示し、一切衆生は一心歸命の信心によりて安樂國に往生すべきを教へ、その一心には五念門の功德を具して威徳廣大の心行なるか故に、之に因て得る所の果も亦菩提の妙果なることを述べられたり。曇鸞大師は『淨土論』に於て往還回向の教義を開き、衆生の淨土に往生して佛果を證するも、また淨土より還り來りて衆生濟度の務を盡すも、皆なこれ他力に由るものなりと示されたり。道綽禪師は『安樂集』に於て聖淨二門の判擇を設け、當今は佛の入滅を去ること遙遠なれば、此の土に於て佛果を求むる聖道の修行は、成就し難く、彼阿彌陀佛の土に往生する、淨土法門のみ獨り遂げ易きことを示されたり。善導大師は『四帖疏』に於て要門弘願の廢立をなし、淨土教内に於て定散諸



善の要門は、眞實の佛意にあらず、弘願念佛の一門のみ、佛の眞意なることを示されたり。源信僧都は『往生要集』に於て報化二土を辨立し、自力の諸善は、化土として劣りたる化佛の淨土に往生すべく、他力の念佛は報土として勝れたる眞實の淨土に往生すべきことを示されたり。源空上人は『選擇本願念佛集』に於て他力念佛は是彌陀佛の選擇の本願なる旨を示されたり。この外重要なるもの少なからずと雖も、そは後に至りて知るを得べし。

別論

第一章 龍樹菩薩

第一節 龍樹菩薩以前の淨土教

印度に於ける淨土教の起原は、固より釋尊の説法に出でし。雖も、釋尊入滅以後三四世紀間は、全く小乘教獨占の時代にして、大乘の教義は隠れて顯はれざりしに因り、淨土教の如きも亦曾て其聲跡の認むべきものあらず、馬鳴菩薩出世して大乘を宣唱せらるゝに至て、淨土教も亦同菩薩の手に藉て開顯せられたり。

馬鳴菩薩の出世は印度迦職色迦王の時代に當れば、蓋し佛滅後第五六世紀の間に在り。す日本垂仁天皇の御宇、支那後漢の初世、

龍樹已前の淨土教

馬鳴菩薩

菩薩は中印度の人にして、初め外道の學を習ひ、佛教を信奉せざりしに、富那奢尊者に度せられて其弟子となり、馬傳者馬傳者とは脇大乘教を中印度に宣揚し、佛鉢と共に二大寶と稱せられしが、迦職色迦王の中印度を攻めんとするの時、其償金に換へられて北印度に往き、王の殊遇を蒙りて、大に大乘教を弘布せり、以來大乘教は印度の北方に向て流傳せしものゝ如し、淨土の教典覺平等が、其後幾はくもなくして、月支國より支那に傳來せしは、蓋し其賜と謂はざるべからず。

起信論の淨土教義

馬鳴菩薩の著述として傳はれるものは數部あり、其内大乘の教義を論述せしものを『大乘起信論』とす。同論の終に修行信心分と名くる一章ありて、詳に大乘佛教の信心修行の相を述べ、然る後に言へるあり曰く「上述の修行成就

し難きものゝ爲めには、如來に勝れたる方便あり、念佛の因縁を以て他方の佛土に往生すること是なり、經に説けるが如く、若し人ありて専ら西方極樂世界の阿彌陀佛を念して、所修の善根を廻向して、彼の世界に生れんと願へば、即ち往生することを得、終に佛道を退轉せず」と此の如く西方願生を勧められたれども、其所述纔に此に止りて、未だ甚だ詳ならざるものあれば、法然上人は淨土所依の經論を選ぶに當りて、『起信論』を以て傍明淨土論部の中に置かれたり。

### 第二節 龍樹菩薩の傳

龍樹菩薩の傳

龍樹菩薩の出世は蓋し佛滅第七世紀に在り皇紀九世紀成務仲哀の御宇

支那後漢の末運、西紀二世紀後半以降然るに頗る長壽を保たれたれば、其生涯は、或は第六世紀の末より、第八世紀の初に涉りたるならん、南天竺梵志の家に生れ、天資聰明穎悟、少ふして百科の學に通じ、夙に名聲を諸國に馳せたり、然るに其才藝に誇りて、身を檢束すること忘れて、一旦は肉慾に耽けりたり、れども、幾ばくもなくして衆慾は苦の本なるを悟り、受戒出家せり、初め小乗を習ひ、九十日間に三藏を誦し盡せり、因て更に經を求めて雪山に入りしに、山中に一の老比丘あり、大乘の經典を授けたれば、之を愛讀し、而して更に又餘經を求めんが爲めに、諸國に周遊せしが、遇ふもの皆其學識に屈服し稱讚止まざりしより、忽ち慢心を發し、我一新教を立てんとして沈思默考せし際、大龍菩薩之を愍み、接して龍宮に入り、寶藏を披て諸の大乘深妙の經典を授

けられたり、龍樹菩薩は之を研鑽し深く妙理を悟り、遂に無生忍を證れり、と云ふ、所謂證歡喜地とは是なり、爾來菩薩は諸の外道の外見を摧破して、大乘教の宣宣に盡瘁し、又淨土教をも開闡して、自己にも西方の往生を願ひ他人をも勸化せられたり、されば「正信偈」には

龍樹菩薩出於世、悉能摧破有無見、宣說大乘無上法、証歡喜地生安樂。

と讚述し、「高僧和讚」には

本師龍樹菩薩は、大乘天上の法をとき、歡喜地を証してそ、ひとへに念佛す、めける、と頌述せられたり。

### 第三節 龍樹菩薩の淨土教義

龍樹菩薩の著述として傳はるもの現に二十餘部あり、其中

『十住毘婆娑論』十七卷 秦鳩摩羅什譯

は『華嚴經』の十地品にて菩薩の十地を説かれたる一段を解釋せしものにして、原本は全部若干卷ありと云へども羅什の譯は第二地に止り、其餘は譯傳せず、此論の第五に『易行品』と云へる一章あり、専ら淨土教義を述せり、又

『十二禮偈』一卷

あり阿彌陀佛の功德を讚嘆したる偈頌なり、右二部は眞宗の採て以て祖典となすものなるが、此外に『大智度論』百卷は『大品般若經』を解釋せしものなれば、其中往々阿彌陀佛に關する論述あり、故に『高僧和讃』には  
本師龍樹菩薩は 智度十住毘婆娑等

つくりておほく西をほめ すゝめて念佛せしめたりと曰へり。

『易行品』には、初めに問答を設け、佛道の修行は久しき年月に涉りて諸の難行を修せざるべからず、然るに我等は之に堪ゆる能はず若し別に方便あらば之を示せよとの問を擧て、其答に此の如きの言は、懦弱怯劣なるもの、發すべきものにして、志幹ある大丈夫の語に非ずと痛く呵斥を加へたりしが、是は阿彌陀佛の慈悲はかゝるものまでも洩らす、却て之を正所被の機となす旨を暗示したるなり。因て次に佛法には無量の門戸あり、即ち難行の道もあり、易行の道もあり、其難行の道は譬へば陸路の歩行の苦きが如く、易行道は譬へば水道の乗船の樂なるが如し、さて、難易二道の行相を譬説し、而して所謂易行道は念佛

難易二道

の信心是なりと開示せり。『正信偈』に

顯示難行陸路苦 信樂易行水道樂

と云ひ、『高僧和讃』に

龍樹大士世にいで、難行易行のみちおしへ 流轉  
輪廻のわれらをば 弘誓のふねにのせたまふ

と云ひしは此意を頌述せられたるなり。又

生死の苦海ほとりなし、ひさしくしづめるわれらを  
ば、彌陀弘誓のふねのみそ、のせてかならずわたし  
ける、

と云へるも、亦易行道を水道の乗船に譬へたる意を演繹  
して、頌述せられたるものなり。

右難易二道一段の文に次で、諸佛の易行と彌陀佛の易行  
と二種の易行あることを明し、其彌陀佛の易行を明す下

本願の釋願

に至り、阿彌陀佛の本願即ち四十八願中の第十八願を出  
して、若し人我を念じ名を稱して自ら歸すれば、即ち必定  
に入りて阿耨多羅三藐三菩提を得」と云ひ、而して更に偈  
頌を造て丁寧反復に阿彌陀佛の功德を讚嘆せり、されば

『高僧和讃』には

本師龍樹菩薩の おしへをつたへきかんひと

本願こゝろにかけしめて つねに彌陀を稱すべし

とも、又

不退のくらしいすみやかに えんとおもはんひこはみ

な 恭敬の心に執持して 彌陀の名號稱すべし

とも頌述せられたり、本願こゝろにかけしめて」と云ひ、恭  
敬の心に執持して」と云へるは、阿彌陀佛の慈悲を感受す  
る所の信心、即ち念我の謂にして、稱名は此信心の口に發

現したるものに外ならざれば、必定の位にて必定して淨土に往生し菩提を証るべき位に入るの正因は、たゞ一の信心あるのみ、稱名は往生の因種に擬する爲めに非ず、所謂報恩の行なれば、『正信偈』には此意を開顯して、

憶念彌陀佛本願 自然即時入必定

唯能常稱如來號 應報大悲弘誓恩

と讃述せられたり。要するに佛法に難易二道あることを説て阿彌陀佛の本願を以て易行道なりと示し、而して阿彌陀佛の本願は、信心稱名即ち自ら阿彌陀佛に歸命するを以て往生の正因となすにある旨を開顯せられしもの、これ龍樹菩薩の淨土教に於ける功績にして、眞宗の取て以て第一祖となす所以なりと知るべし。

易行品要文

要文拔萃

問曰是阿惟越致菩薩初事如先説至阿惟越致地者、行諸難行、久乃可得、或隨聲聞辟支佛地、若爾者、是大衰患、乃至是故若諸佛所説有易行道、疾得至阿惟越致地方便者、願爲説之、答曰、如汝所説、是懦弱怯劣、無有大心、非是丈夫志幹之言也、乃至汝若欲聞此方便、今當説之、佛法有無量門、如世間道有難有易、陸路步行則苦、水道乘船則樂、菩薩道亦如是、或有勤行精進、或有以信方便易行、疾至阿惟越致地者、

(易行品一以下)

若人疾欲至 不退轉地者、應以恭敬心 執持稱名號

(易行品二)

今當具説無量壽佛、世自在王佛、乃至寶相佛、是諸佛世尊、現在十方清淨世界、皆稱名憶念阿彌陀佛本願如是、若人

念我稱名自歸即入必定得阿耨多羅三藐三菩提是故常  
應憶念。

(全七以下)

人能念是佛 無量力功德 即時入必定 是故我常念  
若人願作佛 心念阿彌陀 應時爲現身 是故我歸命  
若人種善根 疑則華不開 信心清淨者 華開則見佛  
乘彼八道船 能度難度海 自度亦度彼 我禮自在人

(全九以下)

#### 第四節 龍樹菩薩同時代の他師の淨土教

龍樹菩薩の同時代、即佛滅第七紀に當て堅慧菩薩ありて  
出世せり、中天竺の刹利種にして博く大小乗の學に通じ、

龍樹菩薩已後  
堅慧論師の淨  
土教義

慧解絶倫と稱せられたり、大藏經中に

『究竟一乘寶性論』四卷 後魏勤那摩提譯

あり堅慧菩薩の造なりと傳ふ、果して然るときは此菩薩  
も亦淨土教を弘傳せられたるなり、何となれば同論の偈  
文に西方願生の意を述べて「三寶清淨の性、善提功德の業、  
我畧して七種を説き、佛教と相應す、此の諸の功德に依て、  
願くは命終の時に於て、無量壽佛の無邊功德身を見たて  
まつらん、我及び餘の信者既に彼佛を見已らば、願くは離  
垢眼を得て無上菩提を成せん」と云へばなり。此偈文は  
善導大師『禮讚』の中に之を依用せられたれども、淨土教義  
として別に觀るべきものなければ、法然上人は同論を以  
て『起信論』と共に傍明淨土論部の中に收められたり。

## 第二章 天親菩薩

### 第一節 天親菩薩の傳

天親菩薩の出世は、佛滅第九世紀に在り、皇紀第十第十一世紀仁德天皇の御宇西紀第四世紀支那東晋の初世北天竺富婁沙、富羅國大夫の沙羅門人國姓橋尸迦と云へるもの、子なり、兄弟三人あり、菩薩は第二子にして、兄を無着と云ひ、弟を師子覺と云ふ、菩薩は薩婆多部に於て出家し、博學多聞、遍く内外の墳典に通して、天下に獨歩するの概あり、初め小乗教を奉し、數多の論を作りて、力を其宣布に竭くし、且つ舊弊を一新せんと務めたり、有名なる『俱舍論』の如きは此時の作なり、蓋し此時期に在ては、只小乗教を弘通せしのみならず、却て大乘教を

誹謗せし事もありしか、後、兄無着の訓誨に由て、翻然として悔悟し、自ら舌を伐りて罪を謝せんとせしを無着が其舌を以て更に大乘を讚嘆せよと勧めしに因りて、爾來無着に就て大乘教を學ひ、其衣鉢を傳へ、而して又數多の論を著はして大に開闡する所あり、後世、菩薩を千部の論師と稱するは、此に由てなり、淨土教義の如きも、馬鳴龍樹既に前に於て之を唱道せられたりと雖とも、並に皆他の教義を論述する著書中に於て傍らに之を説示したるに止りしか、菩薩に至ては、則ち

『無量壽優婆提舍』一卷 魏菩薩流支譯

を著はして、専ら淨土三部經典を釋して、其眞實義即ち阿彌陀佛の本願の玄旨を顯示せられたり、故に此論を『往生淨土論』と稱するなり、『正信偈』に



天親菩薩造論說 歸命無礙光如來  
依修多羅顯眞實 光闡橫超大誓願  
とあるは其功勳を頌述せられたるものなり、年八十歳に  
して、阿踰闍國に於て入寂せられしと云ふ。

### 第二節 天親菩薩の教義

天親菩薩の著述として現に傳はるものは二十一部同本  
異澤は凡て三十一部は凡て三十一部あれとも、淨土教義を論述したるものは、前  
節に擧げたる『淨土論』二卷なりとす、此論は偈頌と長行と  
より成れるものにして、偈頌には自身の信心を表白し、長  
行には其信心の内包功德を解説せり。  
偈頌の劈頭に「世尊よ我一心に無礙光如來に歸命したて

義天親菩薩の教

### 一心

まつりて、安樂國に生れんと願ふ」と云へるは、是正く菩薩  
が釋迦如來に對して自身の信心を啓白したるものなり。  
一心とは疑貳なきの心を謂ふ、歸命とは無礙光如來即ち  
阿彌陀佛の教命に歸順するを謂ふ。是大經に所謂聞名  
信喜にして他力の信心なり。この信心の啓白に次て安  
樂國の三種莊嚴即ち國土の莊嚴主佛の莊嚴と及聖衆の  
莊嚴とを列頌せり、其國土の莊嚴を頌述するの中に「彼の  
世界相を觀するに三界道に勝過し廣大にして邊際なく  
究竟して虚空の如し」と云へるは、安樂國の眞相を開示し  
たるものにして、これ凡夫迷妄の外に在て阿彌陀佛自證  
の顯現したる絶対不可思議の境界なりとの謂なれば、『高  
僧和讃』には之を

安養淨土の莊嚴は 唯佛與佛の知見なり 究竟せる

こと虚空にして 廣大にして邊際なし  
と譯頌せられたり。

而して主佛の莊嚴を頌述する中に至て佛の本願力を觀するに遇ふて空く過くる者なし速かに功德の大寶海を満足せしむと云へり、是阿彌陀佛本願の力用を説示したるものにして一たひ佛の本願を聞信するものには、其利益虚しからず、必ず即時に無上の大功德を得せしむとの謂なり、『高僧和讃』には又之を

本願力にあひぬれば むなくすくるひとそなき  
功德の寶海みちくして 煩惱の濁水へたてなし。  
と譯頌せられたり。此讃に次て

如來淨華の聖衆は 正覺のはなより化生して 衆生の願樂こころくく すみやかにとく満足す

五念門

と云へるは是論偈の聖衆莊嚴の意を述べたるものなり、  
「正覺のはなより化生す」とは阿彌陀佛の自証海に融入するの意なること知るべし。

次に長行には初めに五念門を説き、後に五果門を説て以て偈頌の奥秘を開示せり。五念門と云ふは一に禮拜門は阿彌陀佛を禮拜するなり、二に讚嘆門は如實に阿彌陀佛の名を稱へ其功德を讚嘆するなり、三に作願門とは一心に阿彌陀佛國土に生れんと作願するなり、四に觀察門は阿彌陀佛國土の三種莊嚴を觀察するなり、此四門は自利にして、概して云へば自身が淨土に往生して佛果を証せん爲めの行なり、第五回向門は己れの功德を以て之を他の衆生に施して、己れと全じく度脱せしめんと願ふなり、此一門は利他の行なり、已上五念は是即偈頌に説ける

信心の内包功徳を施設したるものなり。何が故に此の如く信心の内包功徳を施設するやと云ふに、信心の内包に五念門の功徳即自利々他二行を具足するものとすれば、信心即ち是願作佛心度衆生心にして所謂大菩提心なり、大菩提心なるが故に淨土に往生して佛果を証得するの因種となるの旨を顯さんが爲なり。依て『高僧和讃』には

盡十方の无量光佛 一心に歸命するをこそ  
天親論主のみことには 願作佛心とのへ玉へ  
願作佛の心はこれ 度衆生のこゝろなり  
度衆生の心はこれ 利他眞實の信心なり  
信心すなはち一心なり 一心すなはち金剛心  
金剛心は菩提心 この心すなはち他力なり

と頌述せられたり。五果門といふは、一に近門は始めて阿彌陀佛の自證の境に近づきたるなり、二に大會衆門は阿彌陀佛の聖衆の數に入りたるなり、三に宅門は蓮花藏世界即ち阿彌陀佛自證の宅門に入りたるなり、四に屋門は種々の法味樂を受用すとて佛自證の屋舎に入りたるなり、此の四門は入の功徳として佛果菩提に證入する所の功徳相とす、第五に園林遊戯地門とは自證菩提より起て更に生死の園、煩惱の林に廻入して、濟度衆生の化用を現するものなれば、此の一門を出の功徳とす、已上五果は是亦偈頌に説ける信心の果徳を開示したるものなり、即ち因たる信心の内包功徳を五念門となしたるに準じて其果も亦之を五種に施設したるものなれば概して其要をいへば所謂入出二徳にして一菩提果の体用のみ。是の

故に「正信偈」には

歸入功德大寶海 必獲入大會衆數

とて近門と大會衆門とを現生の利益とし次に

得至蓮花藏世界 即証眞如法性身

とて宅門と屋門とて淨土所證の果体とし次に

遊煩惱林現神通 入生死園示應化

とて園林遊戯地門を大悲の化用とせり。「高僧和讃」も同く此意に依て

願土にいたればすみやかに 無上涅槃を證してそ

すなはち大悲をおこすなり これを廻向となつた

と頌述せられたり。

要するに他力信心の相を簡明に一心歸命なりと説示し

て而して此一心の内包に、五念門の功德を具すれば、即是大菩提心なるか故に、必ず佛果を證得すへしと開顯したるもの、これ天親菩薩の淨土教義に於ける發揮にして、眞宗の尊て以て第二祖となす所以なり

要文拔萃

淨土論の要文

世尊我一心	歸命盡十方	無礙光如來	願生安樂國
我依修多羅	眞實功德相	說願偈總持	與佛教相應
觀彼世界相	勝過三界道	究竟如虛空	廣大無邊際
正道大慈悲	出世善根生	淨光明滿足	如鏡日月輪
備諸珍寶性	具足妙莊嚴	無垢光炎熾	明淨曜世間
寶性功德草	柔軟左右旋	觸者生勝樂	過迦旃隣陀
寶華千萬種	彌覆池流泉	微風動華葉	交錯交亂轉

宮殿諸樓閣	觀十方無礙	雜樹異光色	寶欄遍圍繞
無量寶交絡	羅網遍虛空	種々鈴發響	宣吐妙法音
雨華衣莊嚴	無量香普熏	佛慧明淨日	除世癡闇冥
梵聲悟深遠	微妙聞十方	正覺阿彌陀	法王善住持
如來淨華衆	正覺華化生	愛樂佛法味	禪三昧爲食
永離身心惱	受樂常無間	大乘善根界	等無譏嫌名
女人及根缺	二乘種不生	衆生所願樂	一切能滿足
故我願生彼	阿彌陀佛國	無量大寶王	微妙淨華臺
相好光一尋	色像超群生	如來微妙聲	梵響聞十方
同地水火風	虛空無分別	天人不動衆	清淨智海生
如須彌山王	勝妙無過者	天人丈夫衆	恭敬遠瞻仰
觀佛本願力	遇無空過者	能令速滿足	功德大寶海
安樂國清淨	常轉無垢輪	化佛菩薩日	如須彌住持

無垢莊嚴光	一念及一時	普照諸佛會	利益諸群生
雨天樂華衣	妙香等供養	讚諸佛功德	無有分別心
何等世界無	佛法功德寶	我願皆往生	示佛法如佛
我作論說偈	願見彌陀佛	普共諸衆生	子生安樂國

(淨土論一以下)

論曰此願偈明何義、示現觀彼安樂世界見阿彌陀佛願生彼國故、云何觀、云何生信心、若善男子善女人、修五念門行成就、畢竟得生安土國土、見彼阿彌陀佛、何等五念門、一者禮拜門、二者讚嘆門、三者作願門、四者觀察門、五者迴向門、乃至云何迴向、不捨一切苦惱衆生、心常作願、迴向爲首、得成就大悲心故。

(全三)

又向說、觀察莊嚴佛土功德成就、莊嚴佛功德成就、莊嚴菩薩功德成就、此三種成就、願心莊嚴、應知略說入一法句故。

一法句者、謂清淨句、清淨句者、謂眞實智惠無爲法身故。

(全八)

復有五種門漸次成就五種功德、應知、向者五門、一者近門、二者大會衆門、三者宅門、四者屋門、五者園林遊戲地門、此五種門、初四種門成就入功德、第五門成就出功德。

(全九)

### 第三節 天親菩薩已後の淨土教

天親菩薩已後の淨土教義無性論師

天親菩薩と殆んど全時代に無性論師あり、无着菩薩の『攝大乘論』を釋せり、大藏經中に收めたる

『攝大乘論釋』十卷

唐玄奘譯

是なり、その第四十八釋智差別勝相品に願生淨生の意を示されたれども、その教義詳ならざれば、法然上人は之を淨土の傍明論とせり、是より以後印度に於ける淨土教傳播の状況甚だ詳ならずと雖も、支那唐の時代に慈愍三藏西域に遊びて徧く彼地の學者に見佛の法を問ひしに、皆淨土を讚嘆し、極樂に往生して阿彌陀佛に事へんことを勧めたりと傳ふるに依て考ふれば、當時尙淨土教の行はれたりしこと知るべきなり、蓋し天親菩薩の滅後に於て密教漸く盛なりしもの、如し、而して其密教中には往々阿彌陀佛に關するの說ありて、大無量壽經の如きも亦之を密教に混入したるやの迹あり、後世日本の眞言念佛は此に濫觴し、叡山の法華念佛同體論の如きも亦此に胚胎するものなりと知るべし。

### 第三章 曇鸞法師

#### 第一節 曇鸞法師已前の浄土教

曇鸞大師以前の浄土教

佛教の公然支那に東漸せしは佛滅後五百四十六年支那後漢孝明帝の第十年に在り。孝桓帝の世に至て、安息國の沙門安世高『無量壽經』を譯す是を浄土經の支那に入りし權輿とす、此經は異譯七欠中の一なり、眞宗正依の『無量壽經』は曹魏の嘉平四年印度の沙門康僧鎧之を譯せり。蓋し當時は佛教移植の時代にして主として傳譯を事とし、未だ教義弘布の運に至らざりしが、東晋の中葉に道安法師出でて、始めて般若の法門を唱へ、且『往生浄土論』六卷を造りたりと云ふ是を支那に於ける浄土教造疏の嚆矢

とす。然るに其書逸して傳はらざれば其詳なることを知るべからず。道安の弟子に廬山の惠遠法師あり、白蓮社を結びて専ら浄土の業を修せり、是より以後浄土の教、漸く支那に盛なり。

惠遠法師は東晋明帝太寧九年即佛滅後八百十三年皇紀九百三十四年西曆雁門の樓煩に生る。初め道安の講席に陪せしが、後、秦將の亂に由り分れて潯陽に赴き廬山に入りて精舎を建て、定めて永住の地とす、時兵亂によりて隱士の來り集まるもの多し。法師嘗て謂へらく、諸教の三昧甚だ多けれども功高くして進み易きは念佛を先と爲すと、是に於て同志の者一百二十三人と共に社を結びて蓮花漏を刻み晝夜六時に念佛を修せり、所謂白蓮社是なり。法師廬山に居ること三十年嘗て俗塵に入らず、たゞ浄土

を以て志願と爲し、日夕行業怠ることなし、定中に於て數々阿彌陀佛を感見し、末年に及て佛より終期の靈告を蒙れりと云ふ、安帝義熙十二年同年八十三を以て寂す。其臨終の際弟子密漿を進むるものありしに或は其律令に違するあらんことを恐れて左右をして律を檢せしめ、未だ卷を終らざるに合掌西向して逝けり、其平生持律の堅固なること想ふべきなり。法師の淨土教義は著述の傳はるものなければ、詳ならずと雖も、法師の念佛三昧詩序、及劉遺民の發願文あり、之を『樂邦文類』に載す、之に依て考ふるに其定心念佛なりしこと知るべし。

白蓮社

白蓮社の一百二十三人は孰れも皆當時の高僧名士なるが、就中惠遠・慧永・慧持・道生・曇順・僧叡・曇恒・道曷・曇詵・道敬の諸法師、佛馱耶舍、佛馱跋陀羅の兩三藏及劉遺民・張野・周續

慧遠法師已後

之・張詮・宗炳・雷次宗の諸賢士を十八賢と稱するなり、その他社外の徒、陶潛・謝靈運・范甯の諸士皆廬山に出入して盛に念佛を修し、孝武帝亦之を敬慕し、毎月米錢を送て供養せられたりと云ふ。其盛なりしこと想ふべきなり。慧遠法師の已後に在りては菩提流支三藏・慧寵法師・道場法師等の諸師ありて、念佛者として其名聞へ、『安樂集』に之を載せられたれども、其事蹟詳ならず、然るに菩提流支の如きは淨土論の翻譯ありて眞宗に於て、其功績偉なりとなさざるべからざれば、『正信僧』并『高僧和讃』には特に其名を表出せり。

### 第二節 曇鸞大師の傳



慧遠法師の當時鳩摩羅什三藏三論成實の二宗を傳へ、久しからずして宋の景平元年、滅後九百二年曇無讖三藏涅槃經を譯出して涅槃宗の基を成し、梁の武帝天監七年滅後九百八十七年菩提流支三藏十地經論を譯して地論宗の發展を促がし、同帝の大通元年滅後一千八年、達磨大師南天竺より來りて佛心宗此に開け、支那佛教は漸く全盛の運に向はんとす、曇鸞大師の出世は此際に在りき。

曇鸞大師は雁門の人なり、晋の後廢帝元徽四年滅後九百五十五年皇紀一千三百三十六年西紀四百七十六年を以て生る、家、五臺山に近かりしを以て、少ふして自から感ずる所あり、十五歳に及ばざりし頃に出家せしと云ふ。廣く内外の典籍を研鑽し、殊に四論に於て窮むる所ありしが、その大集經を讀むに及びて、文義の難解を慨し、註解を加へ來りしに、功半にし

て疾に羅りければ、業を罷めて周遊し、紛州に至りて愈ゆることを得たりき、乃ち前作を繼がんと欲して、顧みて謂へらく、人世の危脆此の如し、何を以て大業を成せん、寧ろ長生の法を求め得て、しかして後、徐ろに佛法を學ぶに如かじと、去つて江南に往き陶隱居と名くる道士を訪ひ、仙經十卷を受け、心に喜び、魏に歸りて方術を修めんと欲し、洛下に至る、會菩提流支三藏に逢ひ問ふて曰はく、佛法中長生不死の法、仙經に勝れる者ありやと、三藏地に唾して曰はく、是れ何の言ぞ、此の方何の處にか長生の法あらん、たとひ長生を得るも、更に三有に輪廻すべきのみと、乃ち觀無量壽經を授けて或は淨土論なりと云ふ曰はく、汝此を誦すべし、則ち三界復た生ること無く、六道永く往かず、これ吾が金仙氏の長生なりとて、大に諭す所ありければ、鸞

師翻然としてその教に服し、千里を経て求め得たりし仙經を擧げて火中に投じ、これより全く淨土に歸しぬ。『正信偈』に

三藏流支授淨教 焚燒仙經歸樂邦

と曰ひ、『和讃』に

本師曇鸞和尚は 菩提流支のおしへにて

仙經ながくやきすて、淨土にふかく歸せしめきと、曰へるはこれなり。

爾來、師の化風益揚がり、道俗の歸敬、愈盛にして、念佛の法義魏國に振へり、魏主頗る師を重んじて、號して神鸞と云ひ、敕して併州の大巖寺に住せしむ。後汾州北山石壁の立忠寺に移り、時々介山の陰に往きて、徒弟を聚め、淨業を蒸めき、人此地を呼んで鸞公巖と云ふ。魏の興和四年、滅

後一千二十一年、遙山寺に於て寂す年六十七。勅して汾州汾西秦陵の文谷に葬り、建塔を營み、並に碑を立つ。『和讃』にも此事迹を列ねたり、曰はく

魏の主勅して併州の大巖寺にぞおはしける  
やうやくおはりにのぞみては 紛州にうつりたまひにき  
魏の天子はたうとみて 神鸞とこそ號せしが  
おはせしところの其の名をば 鸞公巖とぞ名けたる  
淨業さかりにすゝめつゝ 立忠寺にぞおはしける  
魏の興和四年に 遙山寺にこそうつりしが  
六十有七ときいたり 淨土の往生とげたまふ  
そのとき靈瑞不思議にて 一切道俗歸敬しき  
君子ひとへにおもくして 勅宣くたしてたちまちに  
紛州紛西秦陵の 勝地に靈廟たてたまふ

師翻然としてその教に服し、千里を経て求め得たりし仙經を擧げて火中に投じ、これより全く淨土に歸しぬ。『正信偈』に

三藏流支授淨教 焚燒仙經歸樂邦

と曰ひ、『和讃』に

本師曇鸞和尚は 菩提流支のおしへにて

仙經ながくやきすて、 淨土にふかく歸せしめき

と、曰へるはこれなり。

爾來、師の化風益揚がり、道俗の歸敬愈盛にして、念佛の法義魏國に振へり、魏主頗る師を重んじて、號して神鸞と云ひ、敕して併州の大巖寺に住せしむ。後汾州北山石壁の立忠寺に移り、時々介山の陰に往きて、徒弟を聚め、淨業を蒸めき、人此地を呼んで鸞公巖と云ふ。魏の興和四年、滅

後一千二十一年、遙山寺に於て寂す年六十七。勅して汾州汾西秦陵の文谷に葬り、建塲塔を營み、並に碑を立つ。

『和讃』にも此事迹を列ねたり、曰はく

魏の主勅して併州の 大巖寺にぞおはしける

やうやくおはりにのぞみては 紛州にうつりたまひにき

魏の天子はたうとみて 神鸞とこそ號せしが

おはせしところの其の名をば 鸞公巖とぞ名けたる

淨業さかりにすゝめつゝ 立忠寺にぞおはしける

魏の興和四年に 遙山寺にこそうつりしが

六十有七ときいたり 淨土の往生とげたまふ

そのとき靈瑞不思議にて 一切道俗歸敬しき

君子ひとへにおもくして 勅宣くたしてたちまちに

紛州 紛西秦陵の 勝地に靈廟たてたまふ

と。嘗て問ふ者あり曰はく、十方佛國皆淨土にあらずや、法師何ぞ偏へに西方に願生する、これ偏見の生なるならんかと、師答へて曰はく、吾人凡夫未だ地位に入らざれば智慧淺薄にして念力均しく及び難し、草を置きて牛を引くに恒に心を槽檻に繋ぐべきが如しと、和讃に之を述べて、

世俗の君子幸臨し 勅して淨土のゆへをとふ  
十方佛國淨土なり なにによりてか西にある  
鸞師こたへてのたまはく わが身は智慧あさくして  
いまだ地位にいらざれば 念力ひとしくおよばれず  
と曰へり。

(三) 曇鸞大師の教義

曇鸞大師の教義

曇鸞大師の淨土門に關する著述には『淨土論註』二卷、『讚阿

彌陀佛偈』一卷あり、『淨土論註』二卷は『天親菩薩の『淨土論』を註解したるものにして、上卷にはその偈頌分を、下卷にはその長行分を釋せられたり。『讚阿彌陀佛偈』二卷は全篇偈頌體を用ゐて、阿彌陀佛及其の國土聖衆の功德を嘆賞せられたるものなり、高祖その要を取て和述して讚阿彌陀佛偈和讃四十八首を作らる、これ宗徒の常に讀誦する所なり。

抑、曇鸞大師の當時には、唐土未だ念佛教義の真相を發揮したる人あらず、廬山一流の念佛の如きもその多くは、自力廻向の定心念佛を以て、淨土に願生せしに過ぎず、されば、夙に『無量壽經』『觀經』の流布あり、『十住論』『淨土論』亦譯傳せられたりと雖も、その實意を了知するものなし、且つ當時は上に述べたる如く、聖道諸宗將に勃興せんとする際

なれども、世上多く行はれたるは三論宗なり、而して三論の宗義たる、専ら空無相不可得を説くに在れば、佛も空なり、淨土も無相なりと云へる説を固執するもの多くして、願生淨土を勧めんとするには、頗る困難の時節にてありき、茲に大師「淨土論」を註解して、外に向ては世人の空執に對して、淨土の妙有を説き、内に向ては經論の蘊奧を開顯して、眞實弘願の教義を宣揚せり、その支那淨土教に於ける功勳は、實に著大なるものと謂ふべし。本師發揮の教義多しと雖も、此には最も主要なる一二を擧ぐべし。

(一) 往還回向 「論註」下卷に曰はく、廻向に二種の相あり一には往相二には還相なり」と、廻向とは自己の集めたる一切の功德を以て、衆生に施與し共に佛道に向はしむるの義なり、往相とは「往生淨土時の回向の相狀」還相とは「還來

## 往還廻向

穢國時の回向の相狀」なり、即ち往相回向とは衆生五念門の行を修し、之を一切衆生に回施し、共に安樂淨土に往生せしむるを謂ひ、還相回向とは彼の土に生れ已りて更に大悲を起し、生死の稠林に回入して、衆生を教化し、佛道に向はしむるを謂ふなり。然るに此往還二種回向は、願生者の皆盡く具足せざるべからざるところなるが、今衆生が容易に之を具足して、速かに阿耨菩提を證することを得るものは、抑も何に由て然ることを得るか。「論註」に廣く入出の功德を明し、以て衆生往生の徳相を示し畢りて結末に至りて、此問を起し、而して之に答て「覈に其本を求むるに阿彌陀如來を増上縁とすればなり」と釋せるもの一結千鈞の重きをなすものと謂ふべし、五念門の自利利他、總て佛力によりて成就せらるゝが、故に衆生は容易に

他力の心行を得て、阿耨菩提に至ることを得るの旨、是に於てをや明かなり。されば往還の回向は、衆生の力を以て成就するに非ず、皆是れ彌陀大悲願力に因て成就し得たるものを衆生に回向し給へるによらずんばならず、故に末に約すれば衆生の回向なりと雖も、其の本に就くときは該してこれ佛陀の回向なり。『和讃』には此意を以て回向の文字を直ちに彌陀に歸して、この回向あるが故に、我等衆生に廣大なる心行を得ることを述べて、

彌陀の回向成就して 往相還相ふたつなり  
 これらの回向によりてこそ 心行ともにえしむなれ  
 と曰へり。此の如くなれば往相の回向とは衆生自己の功德を回施して他の衆生を佛道に向はしむるにあらずして阿彌陀佛よりその成就したる自利利他の行を衆生

三不三信

に回向し給ひ、衆生をして之に因りて淨土に往生し、生死即涅槃の證に至らしめ給ふを指さるべからず。『和讃』に直ちに前の讚を承けて、

往相の迴向とくことは 彌陀の方便ときいたり  
 悲願の心行えしむれば 生死すなはち涅槃なり  
 と曰へり。還相の回向も亦同じく、往生の菩薩の利他教化皆是れ阿彌陀佛の回向なるを以て、次の讚に、

還相の廻向とくことは 利他教化の果をえしめ  
 すなはち諸有に廻入して 普賢の徳を修するなり  
 と曰へり。凡そ『淨土論』所明の往還因果の徳相を詳かにして、これを他力の本に結歸したるもの、眞に仰ぐべきの明釋なり。

(二)三不三信 凡そ稱名念佛に如實不如實とて佛意に

契ひたる、まことの稱名と、佛意に契はざるいつはりの稱名との二種あり、一を如實修行相應と名け、一を不如實修行と名く。而してこの二種の區別を生ずるは抑何によりて然るか、これ信心の眞實なると眞實ならざるとに由らすんばあらず、この信心を判するに鸞師は三信と三不信を立てられたり。三不信とは一には信心淳からず若存若亡するがゆへに、若存若亡とは横に一念に就きて、その淳厚ならざることをしめしたる言なり。二には信心一ならず、決定の信なきが故に、決定なしとは横に一念の上に在りても、又豎に多念の上に在りても、並に一定せざるを謂ふ。三には信心相續せず、餘念間はるか故に、餘念間はるとは、豎に多念に約して前後相續せざるを謂ふ。かゝる信心の人は稱名に至るまで、不如實にして往生を

得へからざるなり。『和讃』に曰はく

不如實修行といへること 鸞師釋してのたまはく  
一者信心あつからず 若存若亡するゆへに  
二者信心一ならず 決定なきゆへなれば  
三者信心相續せず 餘念間故とのへたまふ  
と然るに此三信は展轉相成とて、甲あれば乙あり乙あれば甲あり『和讃』に亦此意を述て曰はく

三信展轉相成ず 行者こゝろをとむべし  
信心あつからざるゆへに 決定の信なかりけり  
決定の信なきゆへに 念相續せざるなり  
念相續せざるゆへ 決定の信を得ざるなり  
決定の信を得ざるゆへ 信心不淳とのへたまふ  
三不信の展轉相成此の如く、一の不信の相こゝに存すれ

ば他の不信の相、皆之に随ふなり。此三不信に反對して、三信を立つ、是を淳心、一心、相續心と云ふ、かゝる信心の稱名は如實修行相應にして、決定往生の益を得るなり。故に『和讃』に前の句に次で左の如く謂へり、

如實修行相應は 信心ひとつにさだめたり

要するに、一心の相狀を三不三信を以て反顯して、稱名の如實不如實を判し、一心の果徳即菩提の体用を往還二種となし、之を佛陀の他力回向なりと示して、以て淨土論の秘蘊を開顯したるものこれ鸞師一代の功勳にして、眞宗の取て以て第三祖となす所以なり。

要文拔萃

謹案龍樹菩薩十住毗婆娑云、菩薩求阿毗跋致、有二種道、

論註要文

一者難行道、二者易行道、難行道者、謂於五濁之世、於無佛時、求阿毗跋致爲難、此難乃有多途、粗言五三以示義意、一者外道相善亂菩薩法、二者聲聞自利障大慈悲、三者無願惡人破他勝徳、四者顛倒善果能壞梵行、五者唯是自力無他力持、如斯事、觸目皆是、譬如陸路步行則苦、易行道者、謂但以信佛因縁、願生淨土、乘佛願力、便得往生彼清淨土、佛力住持、即入大乘正定之聚、正定即是阿毗跋致、譬如水路乘船則樂、此無量壽經優婆提舍、蓋上衍之極致、不退之風航者也、無量壽是安樂淨土如來別號、釋迦牟尼佛在王舍城及舍衛國於大衆之中、說無量壽佛莊嚴功德、即以佛名號爲經体、

(論註上一)

夫菩薩歸佛如孝子之歸父母、忠臣之歸君后、動靜非已、出沒必由、知恩報徳、理宜先啓、又所願不輕、若如來不加威神、



(論註上四)

將何以達乞加神力所以仰告  
我一心者天親菩薩白督之詞言念無礙光如來願生安樂  
心心相續無他想間雜

(全)

問曰大乘經論中處處說眾生畢竟無生如虛空云何天親  
菩薩言願生耶答曰說眾生無生如虛空有二種一者如凡  
夫所謂實眾生如凡夫所見實生死此所見事畢竟無所有  
如龜毛如虛空二者謂諸法因緣生故即是不生無所有如  
虛空天親菩薩所願生者是因緣義因緣義故假名生非如  
凡夫謂有實眾生實生死也問曰依何義說往生答曰於此  
間假名人中修五念門前念與後念作因穢土假名人淨土  
假名人不得決定一不得決定異前心後心亦復如是何以  
故若一則無因果若異則非相續是義觀一異門論中委曲

(全上五)

真實功德相者有二種功德一者從有漏心生不順法性所  
謂凡夫人天諸善人天果報若因果皆是顛倒皆是虛偽  
是故名不實功德二者從菩薩智慧清淨業起莊嚴佛事依  
法性入清淨相是法不顛倒不虛偽名為真實功德云何不  
顛倒依法性順二諦故云何不虛偽攝眾生入畢竟淨故

(論註上六)

問曰天親菩薩回向章中言普共諸眾生往生安樂國此指  
共何等眾生耶答曰案王舍城所說無量壽經佛告阿難十  
方恆河沙諸佛如來皆共稱嘆無量壽佛威神功德不可思  
議諸有眾生聞其名號信心歡喜乃至一念至心回向願生  
彼國即得往生住不退轉唯除五逆誹謗正法案此而言一  
切外凡夫人皆得往生又如觀無量壽經有九品往生下下  
品生者或有眾生作不善業五逆十惡具諸不善如此愚人

以惡業故、應墮惡道、經歷多劫、受苦無窮、如此愚人、臨命終時、遇善智識種々、安慰為說妙法、教令念佛、此人苦逼、不遑念佛、善友告言、汝若不能念者、應稱無量壽佛、如是至心、令聲不絕、具足十念、稱南無無量壽佛、稱佛名故、於念々中、除八十億劫生死之罪、命終之後、見金蓮華、猶如日輪、住其人前、如一念頃、即得往生極樂世界、於蓮華中、滿十二大劫、蓮華方開、當以此債觀世音大勢至、以大悲音聲為其廣說諸法、實相除滅罪法、聞已歡喜、應時則發菩提之心、是名下品下生者、以此經證明、知下品凡夫、但令不誹謗正法、信佛因緣、皆得往生、

(論註上二十)

問曰、業道經言、業道如秤、重者先牽、如觀無量壽經言、有人造五逆十惡、具諸不善、應墮惡道、經歷多劫、受無量苦、臨命終時、遇善知識、教稱南無無量壽佛、如是至心、令聲不絕、具

足十念、便得往生安樂淨土、即人大乘正定之聚、畢竟不退與三塗諸苦永隔、先牽之義於理如何、又曠劫已來、備造諸行、有漏之法、繫屬三界、但以十念念阿彌陀佛、便出三界、繫業之義、復欲云何、答曰、汝謂五逆十惡繫業等為重、以下下品人十念為輕、應為罪所牽、先墮地獄、繫在三界者、今當以義按量輕重之義、在心、在緣、在決定、不在時節、久近多少也、云何在心、彼造罪人、自依止虛妄顛倒見生、此十念者、依善知識方便安慰、聞實相法生、一實一虛、豈得相比、譬如千歲闇室、光若暫至、即便明朗、闇豈得言在室千歲而不去耶、是名在心、云何在緣、彼造罪人、自依止妄想心、依煩惱虛妄果報衆生生、此十念者、依止無上信心、依阿彌陀如來方便莊嚴真實清淨無量功德名號生、譬如有人被毒箭所中、截筋破骨、聞滅除藥鼓、即箭出毒除、豈可得言彼箭深毒厲、聞鼓

音聲不能拔箭去毒耶是名在緣云何在決定彼造罪人依止有後心有間心生此十念者依止無後心無間心生是名決定按量三義十念者重重者先牽能出三有兩經一義耳

(全三十二以下)

問曰幾時名爲一念答曰百一生滅名一刹那六十刹那名爲一念此中云念者不取此時節也但言憶念阿彌陀佛若總相若別相隨所觀緣心無他想十念相續名爲十念但稱名號亦復如是

(全三十四)

問曰心若他緣攝之令還可知念之多少但知多少復非無問若凝心注想復依何可得記念之多少答曰經言十念者明業事成辨耳不必須知頭數也如言螻蛄不識春秋伊蟲豈知朱陽之節乎知者言之耳十念業成者是亦通神者言之耳但積念相續不緣他事便罷復何暇須知念之頭數也

若必須知亦有方便必須口授不得題之筆點

(全三十四)

如彼名義欲如實修行相應者彼無碍光如來名號能破衆生一切無明能滿衆生一切志願然有稱名憶念而無明由在而不滿所願者何者由不如實修行與名義不相應故也云何爲不如實修行與名義不相應謂不知如來是實相身是爲物身又有三種不相應一者信心不淳若存若亡故二者信心不一無決定故三者信心不相續餘念間故此三句展轉相成以信心不淳故無決定無決定故念不相續亦可念不相續故不得決定信不得決定信故心不淳與此相違名如實修行相應是故論主建言我心

(註下二以下)

云何回向不捨一切苦惱衆生心常作願回向爲首得成就

大悲心故、回向有二種相、一者往相、二者還相、往相者、以己功德回施一功衆生、作願共往、生彼阿彌陀如來安樂淨土、還相者、生彼土已、得奢摩他毘婆舍那方便力成就、回入生死稠林、教化一功衆生、共向佛道、若往若還、皆爲拔衆生、渡生死海、是故言回向爲首得成就大悲心故、

(觀土論註下五)

不可思議力者、總指彼佛國土十七種莊嚴功德力不可得思議也、諸經統言有五種不可思議、一者衆生多少不可思議、二者業力不可思議、三者龍力不可思議、四者禪定力不可思議、五者佛法力不可思議、此中佛土不可思議有二種力、一者業力、謂法藏菩薩出世善根大願業力所成、二者正覺阿彌陀法王善住持力所攝、

(論註下六)

凡是雜生世界、若胎若卵、若濕若化、眷屬若干、苦樂萬品、以雜業故、彼安樂國土、莫非是阿彌陀如來正覺淨華之所化生、同一念佛無別道故、遠通夫四海之內、皆爲兄弟也、

(全下十三)

明彼淨土是阿彌陀如來清淨本願無生之生、非如三有虛妄生也、何以言之、夫法性清淨畢竟無生、言生者是得生者之情耳、

(全下十五)

問曰、上言知生無生、當是上品生者、若下下品人、乘十念往生、豈非取實生耶、但取實生、即墮二執、一恐不得往生、二恐更生迷惑、答譬如淨摩尼珠置之濁水、水即清淨、若人雖有無量生死之罪濁、聞彼阿彌陀如來至極無生清淨寶珠名號、投之濁心、念念之中、罪滅心淨、即得往生、又是摩尼珠以玄黃幣裏投之於水、水即玄黃、一如物色、彼清淨佛土、有阿

彌陀如來無上寶珠，以無量莊嚴功德成就，帛裏投之於所  
往生者心水，豈不能轉生見為無往智乎？又如冰上燃火，火  
猛則冰解，冰解則火滅，彼下品人雖不知法性無生，但  
以稱佛名力，作往生意，願生彼土，彼土是無生界，見生之火  
自然而滅。

（註下十六以下）

凡夫衆生身口意三業，以造罪輪轉三界，無有窮已，是故諸  
佛菩薩莊嚴身口意三業，用治衆生虛誑三業也。云何用治  
衆生以身見故，受三塗身卑賤身醜陋身八難身流轉身，如  
是等衆生見阿彌陀如來相好光明身者，如上種種身業繫  
縛皆得解脫，入如來家，畢竟得平等身業。

（全下十八）

不虛作住持者，依本法藏菩薩四十八願，今日阿彌陀如來  
自在神力，願以成力，力以就願，願不徒然，力不虛設，力願相

符，畢竟不差，故曰成就。（註下二十）

諸佛菩薩有二種法身，一者法性法身，二者方便法身，由法  
性法身生方便法身，由方便法身出法性法身，此二法身，異  
而不可分，一而不可同，是故廣略相入，統以法名。

（全下二十五）

案王舍城所說無量壽經，三輩生中，雖行有優劣，莫不皆發  
無上菩提之心，此無上菩提心，即是願作佛心，願作佛心，即  
是度衆生心，度衆生心，即攝取衆生，生有佛國土心，是故願  
生彼安樂淨土者，要發無上菩提心也。若人不發無上菩提  
心，但聞彼國土受樂無間，為樂故願生，亦當不得往生也，是  
故言不求自身住持樂，欲拔一切衆生苦故。

（全下二十八）

凡釋回向名義，謂以已所集一切功德，施與一切衆生，共向

佛道巧方便者、謂菩薩願以已智慧火、燒一切衆生煩惱草木、若有一衆生不成佛、我不作佛、而衆生未盡成佛、菩薩已自成佛、譬如火捺欲摘一切草木、燒令使盡、草木未盡、火捺已盡、以後其身而身先故、名巧方便、此中言方便者、謂作願攝取一切衆生、共同生彼安樂佛國、彼佛國即是畢竟成佛道路無上方便也、

(全下二十八)

問曰、有何因緣、言速得成就阿耨多羅三藐三菩提、答曰、論言修五門、行以自利利他成就故、然覈求其本、阿彌陀如來爲增上緣、他利之與利他、談有左右、若自佛而言、宣言利他、自衆生而言、宣言他利、今將談佛力、是故以利他言之、當知此意也、凡是生彼淨土、及彼菩薩人天所起諸行、皆緣阿彌陀如來本願力故、何以言之、若非佛力、四十八願便是徒設、今的取三願用證義意、乃至以斯而推、他力爲增上緣、得不

道綽禪師以前  
及同時代の淨  
土教

然乎、當復引例示自力他力相、如人畏三塗故、受持禁戒、受持禁戒故、能修禪定、以禪定故、修習神通、以神通故、能遊四天下、如是等、名爲自力、又如劣夫跨驢不上、從轉輪王行、便乘虛空、遊四天下、無所障礙、如是等、名爲他力、遇哉後之學者、聞他力可乘、當生信心、勿自局分也、

(全下三十四)

### 第四章 道綽禪師

#### 第一節 道綽禪師以前及同時代の淨土教

禪師の同時代、即梁の中大通年間に、佛陀扇多三藏始めて、無着菩薩の攝大乘論を譯し、陳の代に至て、眞諦三藏又同論及天親等の釋論を譯せり、是に於て攝論宗起れり、此の

攝論の中に願生安樂を以て別時意趣とて一の方便説とするの説あるに因りて、爾來一百餘年間他力往生の路塞りしと云ふ、蓋し鸞師流の他力往生の法門は一時廢頽せしなり、然るに眞諦三藏の攝論を譯せしの後、幾ばくもなく涅槃地論の兩宗を弘むる、淨影寺の惠遠法師出て、『無量壽經』及『觀無量壽經』の義疏を著はし、尋て天臺宗開祖智顛法師、起て又『觀經』の疏を製し、且止觀の中四種三昧の行法を明にして、念佛を奨勸し、既にして三論宗高祖吉藏法師あり、是亦大觀二經の疏を著はして、念佛法門を説けり、其他諸宗の高僧の念佛を修せしもの、尠からざれば、當時亦淨土教盛ならずと謂ふべからざるなり、然るに右諸師の念佛は自宗の教義を根本として之に依て修するものなるを以て法身の理を觀するの念佛に非ざれば、則ち

自力定心の念佛にして鸞師流の他力念佛にはあらず、皆淨土教の實義を知らざるものなり、道綽禪師の淨土に歸せしは、惠遠智顛兩法師よりは、少く後代に屬すれども、天臺三論既に勃興して華嚴法相亦將に興らんとするの際なれば、聖道門全盛の時代と謂ふべし、加之攝論の宗風未だ熄まず、兜率往生を願ふの徒、世に尙多かりければ、禪師が其間に起て他力念佛を唱道せられしは、洵に鳳の朝陽に鳴くの看あるなり。

## 第二節 道綽禪師の傳

道綽禪師の傳

道綽禪師は併州汶水の人なり、陳武帝天嘉三年滅後、一千四十年、皇紀一千六百二十二年、を以て生る、十四にして

出家し、名家を歴訪して學業を進め、涅槃經を講ずること二十四回に及び、後、瓚禪師に師事して禪定をも修せられ、道譽次第に高し。恒に汝水石壁谷の立忠寺に在りしが、此寺は齊の時、曇鸞大師の淨業を修せられし所なりしかば、竊かにその高德に追慕する所ありき。寺に鸞師の碑ありて、具さに當時の祥瑞を記せり。師其文を讀みて、彌々崇信を渥くし、嘗て謂らく、鸞師の智徳我等に勝ること遠し。然るに尙ほ四論の講説を捨て、専ら淨土の業を修し、以て往生を遂げぬ。况んや我等小子、智解淺劣なり、須からく念佛を修して往生を願ふべきなりと、大業五年四十八歳にして斷じて、涅槃の講説を捨て、専ら淨土の業に従はれぬ。爾來一向に阿彌陀佛を念じ、日課七萬禮拜供養怠ることなし。貞觀の頃より、道俗を開悟せんが爲めに、觀無量壽

經を講じて二百回に至る、詞辨流暢、義理明晰にして、頗る時人の歸仰を惹き、師の教を奉じて念佛する者數を知らず、三縣の道俗七歳已上皆念佛を解し、最も精進なる者は、小豆を以て數となし八十石、若しくは九十石を得たる者あり、少なき者も二十石に上りしと云ふ、當時の盛況思ふべし。『和讃』に曰はく、

本師道綽大師は、涅槃の廣業さしをきて、  
本願他力をたのみつゝ、五濁の群生すゝめしむ  
と唐の貞觀十九年滅後一千二百二十四年皇紀千三百五十五年  
西紀六百四十五年立忠寺に寂す年八十四、

### 第三節 道綽禪師の教義



師の淨土門に關する著書は『安樂集』兩卷あり。この書は『觀無量壽經』の疏なりと雖、字句を細釋したる者には非ずして、深く其宗致に入て論述したる者なり。蓋し師の當時は、前節に述べたるが如く、聖道全盛の時代なれば、聖道の教理を以て、淨土の法義を混亂するもの少なからざりしかば、師は此等に對して、婉曲に破斥することを努められ、由りて以て淨土門の實義を維持するを得たりき。『安樂集』に於ける別時意の會釋の如きは其一なり。されば師の教義は『安樂集』によりて見るを得べく、その發揮に係るもの少なからざれども、その最も主要なるものは聖淨二門の判釋即ち是なり。

聖淨二門

聖淨二門の判は『安樂集』上廿七に出でたり、一を聖道門と謂ひ、一を往生淨土門と謂ふ、即ちこれ一代佛

教を分ちてこの二門に定められたるなり。聖道門とは此土に於て道を修し、佛果を證ることを教ふるの法門に名け、往生淨土門とは彼土に往生して、佛果に到ることを教ふるの法門に名けたり。

初祖龍樹菩薩『十住毘婆娑論』に於て、難易二道を分別して以て易行の仰ぐべきを勧められたれども、未だ自他力此土他土の區別を明言するに至らざりしを、鸞師これを承けて一步を進め、難易の所由は自他力の別に在ることを示し、且つ有佛無佛の差異あることを明にせしも、未だ直ちに是を以て教判に具ふるに至らざりしが、道綽禪師に來りて是等の祖意を概括し、此に明かに聖淨二門を分ちて、此彼二土の別を提示し、而して約時被機とて之を時代と機根とに考へて、以て二門の通否を論斷せり。

抑禪師の時代は、佛世を去ること頗る遙遠にして衆生の機根隨て漸く微劣なり、因て『大集經』の

我が末法時の中億々の衆生行を起し道を修するも未だ一人も得るものあらず

との語を引ききて、而して、當今末法は五濁惡世なり、唯淨土の一門のみありて如何なる惡機も通入すべきの要路なりと云へり、『正信偈』には之を

道綽決聖道難證 唯明淨土可通入  
と頌述し、『和讚』には

本師道綽禪師は 聖道萬行さしをきて  
唯有淨土一門を 通入すべきみちとごく  
とも又

末法五濁の衆生は 聖道の修行せしむとも

ひとりも證をえじこそ 教主世尊はこきたまへとも讚述せり。而して淨土門の体を示すに、大經十八願を出し、觀經下々品を以て之を釋述し、若し衆生ありて縱令ひ一生惡を造ることも、命終の時に臨んで十念相續して我名字を稱せんに、若し生れずば正覺を取らじと云へり『和讚』に

縱令一生造惡の 衆生引接のためにて  
稱我名字と願しつゝ 若不生者とちかひたり  
と頌述せしは此意なり。この第十八願文の次に觀經九品の機を擧げ、その下品の機に於て、若し起惡造罪を論ずれば何ぞ暴風駛雨に異らん」と述べて、是を以て諸佛大慈勸めて淨土に歸せしむ、縱使ひ一形惡を造るとも、但能く意を繋ること專精にして、常に能く念佛すれば一切諸障

自然に消除して定て往生を得と云て本願の正意、偏に惡機救濟に在るの旨を示せり、之を「和讃」には

濁世の起惡造惡は暴風駛雨にことならず  
諸佛これらをあはれみてすゝめて淨土に歸せしめり  
一形惡をつくれごも專精にこゝろをかけしめて  
つねに念佛せしむれば諸障自然にのすこりぬ  
と讃述せり。要するに聖淨二門の判釋をなして、唯淨土他力の法門のみ今の時機に適應するの旨を明にしたるもの、これが道綽禪師一代の功勳にして、眞宗に於て選て以て第四祖とする所以なり。

要文拔萃

第一大門中明教興所由、約時被機勸歸淨土者、若教赴時

機易修易悟、若機教時乖、難修難入、是故正法念經云、行者一心求道時、常當觀察時方便、若不得時、無方便、是名爲失、不名利、何者如攢濕木以求火、火不可得、非時故、若折乾薪以覓水、水不可得、無智故、乃至是以韋提大士自爲及哀愍末世五濁衆生輪廻多劫、徒受痛燒故、能假遇苦緣、諮開出路、豁然大聖加慈、勸歸極樂、若欲於斯進趣、勝果難階、唯有淨土一門、可以情趣入、(安樂集上二以下)

第二據諸部大乘明說聽方軌者、於中有六、第一大集經云、於說法者、作醫王想、作拔苦想、所說之法、作甘露想、作醍醐想、其聽法者、作增長勝解想、作愈病想、若能如是、說者聽者皆堪紹隆佛法、常生佛前、云云(全上卷二)  
阿陀淨國位該上下、凡聖通往者、今此無量壽國、是其報淨土、由佛願故、乃該通上下、致令凡夫之善、並得往生、由該上

故天親龍樹及上地菩薩亦皆生也。(全十)

然大乘深藏名義塵沙是故涅槃經云一名無量義一義無量名要須偏審衆典方曉部旨非如小乘俗書案文畢義何意須然但淨土幽廓經論隱顯致令凡情種種圖度恐涉詔語刀刀百盲偏執雜亂無知妨礙往生。(全十七)

問曰或有人言大乘無相勿念彼此若願生淨土便是取相轉增漏縛何用求之答曰如此計者將謂不然何者一切諸佛說法要具二緣一依法性實理二須順其二諦彼計大乘無念但依法性然謗無緣求即是不順二諦如此見者墮滅空所收是故無上依經云佛告阿難一切衆生若起我見如須彌山我所不懼何以故此人難未即得出離常不壞因果不失果報故若起空見如芥子我即不許何以故此見者破喪因果多墮惡道未來生處必背我化今勸行者理雖無生

然二諦道理非無緣求一切得往生也。(同十七)

若攝緣從本即是心外無法若分二諦明義淨土無妨是心外法也。(同上九)

問曰或有人言願生穢國教化衆生不願往生淨土是事云何答曰此人亦有一徒何者若身居不退已去爲化雜惡衆生故能處染不染逢惡不變如鵝鴨入水水不能濕如此人等堪能處穢拔苦若是實凡夫者唯恐自行未立逢苦即變欲濟彼者相與俱沒如似逼鷄入水豈能不濕是故智度論云若凡夫發心即願在穢土拔濟衆生者聖意不許何意然者龍樹菩薩釋云譬如四十里冰如有一人以一升熱湯投之當時似如小減若經夜至明乃高於餘者凡夫在此發心救苦亦復如是以貪瞋境界違順多故自起煩惱返墮惡趣故也。(同二十以下)

辨難行道易行道者於中有二一出二種道二問答解釋余既自居火界實想懷怖仰惟大聖三車招慰且羊鹿之運權息未達佛訶邪執障上求菩提縱後廻向仍名迂廻若徑攀大車亦是一途只恐現居退位嶮徑遙長自德未立難可昇進是故龍樹菩薩云求阿毗跋致有二種道一者難行道二者易行道乃至易行道者謂以信佛因緣願生淨土起心立德修諸行業佛願力故即便往生乃至衆生亦爾在此起心立行此是自力願生淨土臨命終時阿彌陀如來光臺迎接遂得往生即爲他力故大經云十方人天欲生我國者莫不皆以阿彌陀如來大願業力爲增上緣也若不如是四十八願便是徒設語後學者既有他力可乘不得自局已分徒在火宅也

(全上卅二以下)

又問曰一切衆生皆有佛性遠劫以來應值多佛何因至今

仍自輪廻生死不出火宅答曰依大乘聖教良由不得二種勝法以排生死是以不出火宅何者爲一二謂聖道二謂往生淨土其聖道一種今時難證一由去大聖遙遠二由理深解微是故大集月藏經云我末法時中億億衆生起行修道未有一人得者當今末法現是五濁惡世唯有淨土一門可通入路是故大經云若有衆生縱令一生造惡臨命終時十念相續稱我名字若不生者不取正覺又復一切衆生都不自量若據大乘真如實相第一義空曾未措心若論小乘修入見諦修道乃至那含羅漢斷五下除五上無問道俗未有其分縱有人天果報皆爲五戒十善能招此報然持得者甚希若論起惡造罪何異暴風駛雨是以詣佛大慈勸歸淨土縱使一形造惡但能繫意專精常能念佛一切諸障自然消除定得往生何不思量都無去心也 (全上三十七以下)

第四依觀經及餘諸部所修萬行，但能迴願，莫不皆生。然念佛一行，將爲要路。何者？審量聖教，有始終兩益。若欲生善起行，則普該諸度。若滅惡消災，則治諸鄣。故下經云：念佛衆生，攝取不捨，壽盡必生。此名始益。言終益者，依觀音授記經云：阿彌陀佛住世長久，兆載永劫，亦有滅度。般涅槃時，唯有觀音勢至，住持安樂，接引十方。其佛滅度，亦與住世時節等同。然彼國衆生，一切無有覩見佛者。唯有一向專念阿彌陀佛往生者，常見彌陀。現在不滅，此即是終時益也。所修餘行，迴向皆生。世尊滅度，有覩不覩，勸後代審量，使沾遠益也。

(全下三以下)

問曰：何故要須面向西坐禮念觀者？答曰：以閻浮提云日出處，名生沒處，名死。藉於死地，神明趣入，其相助便，是故法藏菩薩願成佛在西，悲接衆生，由坐觀禮念等，面向佛者，是隨

世禮儀。若是聖人，得飛報自在，不辨方所。但凡夫之人，身心相隨，若向餘方，西往必難。(全下十五)

問曰：依大乘諸經，皆云無相，乃是出離要道。執相拘礙，不免塵累。今勸衆生捨穢忻淨，是義云何？答曰：此義不類。何者？凡相有二種。一者於五塵欲境，妄愛貪染，隨境執着。此等是相名之爲縛。二者愛佛功德，願生淨土。雖言是相，名爲解脫。何以得知？如十地經云：初地菩薩，尚自別觀二諦，勵心作意，先依相求。終則無相，以漸增進。體大菩提，盡七地終心，相心始息。入其八地，絕於相求。方名無功用也。是故論云：七地已還，惡貪爲障，善貪爲治。八地已上，善貪爲障，無貪爲治。况今願生淨土，現是外凡所修善根，皆從愛佛功德生。豈是縛也？故涅槃經云：一切衆生，有二種愛。一者善愛，二者不善愛。不善愛者，唯愚求之。善法愛者，諸菩薩求。是故淨土論云：觀佛國

土清淨味攝受衆生大乘味類事起行願取佛土味畢竟住持不虛作味有如是無量佛道味故雖是取相非當執縛也又彼淨土所言相者即是無漏相實相相也。(全十七)

### 第五章 善導大師

#### 第一節 善導大師の傳

善導大師の傳

善導大師、姓は朱、泗州の人なり、隋の煬帝大業九年佛滅後一千九十二年皇紀千二百七十三年西紀六百十三年を以て生る。幼にして密州の明勝法師に投じて出家し法華維摩を誦せしが嘗て自から思へらく教門は一道一途のみに非ず若し機に契はざれば修行の効無けんミ乃はち大藏に入り手に信せて經を探り以て有縁の教を求めしに『觀無量壽經』を得

たりき、此に於て竊かに冥契ミ爲し喜んで十六觀法を修習せしが後慧遠法師の芳躅を慕ふて廬山に詣り其遺範に接するに及び倍々歸仰を渥ふせり。是れより天下を周遊し名徳を歴訪し道を進め唐の貞觀中西河に至りて道綽禪師に謁せしに、その方等懺を行し觀經を講ずるを見て嘆じて曰はくこれ眞に佛道に入るの津要なり、餘業は迂僻にして成し難く、唯此の觀門によりてのみ速に生死を超ゆべきなりと、乃はち其門に入りぬ。或る人師に問ふて曰はく弟子念佛して往生を得べきや否やと、師乃はち一莖の蓮華を佛前に置かして曰はく七日行道して華若し萎悴せずんば、則ち往生を得べしと、七日にして華果して萎まざりしと、綽禪師亦大に其造詣の深きに服し、請ふて入定して往生を得べきや否やを觀らしむ、師定

に入り須臾にして報じて曰はく、師當さに三罪を懺悔せば、方しめて往生を得べし。一には嘗て佛の尊像を擔牖の下に安置して、自己は却りて深房に處りき。二には嘗て出家の人を驅使したりき。三には屋宇を營造したりしとき、蟲命を損傷しき。師宜しく十方佛の前に第一罪を懺し、四方僧の前に第二罪を懺し、一切衆生の前に於て第三罪を懺せらるべし。と、綽禪師靜かに往答を想ふに皆然り、乃はち深く悔謝するところありて、後師に見ゆ、師曰はく、罪滅しぬ。後日、白光の照燭あらば、是れ師往生の相なりと。綽師の門を辭して後、京師に至り、盛に念佛を弘通す、入りては則ち合掌跪坐一心に念佛し、力竭くるに非れば出でず、寒冷にも汗を流すに至れり、出で、は、則ち道俗の爲めに勸化開導暫くも怠らず、三十餘年別の寢處なく、精勤

實に言ふべからざりき、書寫する所の阿彌陀經十萬餘卷に及び、畫く所の淨土變相三百餘壁を超へぬ。されば僧尼の身を殺して供養せし者百餘人、妻子を捨て、梵行を修し阿彌陀經を誦するここ十萬徧より三十萬徧に及び、念佛日々に一萬五千より十萬徧に至り、且つ念佛三昧を得て淨土に往生せしが如き者甚だ多かりき、道化の盛なるここ前後殆んど其比を見ず。史家歎じて佛法東に行はれてより未だ禪師の如き盛徳有らすと言ふ。永隆二年佛滅後千百六十年皇紀一千三百四十年西紀六百八十一年、年六十九歳にして寂す。師嘗て念佛して聲々口より光明を出すの瑞ありしかば、寺額を賜ふて光明寺と名けしより、後世師を稱して光明寺の和尚と稱す。師身を持する頗る謹嚴、嘗て自から責めて曰はく、釋尊尚ほ分衛し給ひき、善導何人な



れば端居して供養を求むるやと、常に乞食を樂しみ、戒品を護持して毫も犯す所なく、三衣瓶鉢人をして持洗せしむることなく、曾て目を擧げて女人を視ず、一切名利の念を斷ち、綺詞戲笑亦未だこれ有らざりき、師の高徳を敬慕して供養するもの絶えざれども、衣服飲食僅に身命を支ふるの外、擧げて是を人に施しぬ、所在の處、敗寺故塔を見れば皆悉く造營し、燈を燃し、明を續けて常に絶えざらしめたりと云ふ。今日の宗徒、芳躅を追ふて戒むる所無かるべからず。

### 第二節 善導大師の教義

善導大師の教義

隋より唐に到りて中央亞細亞との交通容易となり、往來

漸く頻繁を加へしより、諸宗教の東して支那に入る者多く、祇教、摩尼教、景教、回教皆唐代に行はれたり、唐の太宗の如き頗る佛教に渥かりしにも關らず、また深く景教を奉信して爲めに波斯寺を建てたりと云ふを以てすれば、畢竟政略上大に爲にする所ありて何れの宗教にも寛容なりしが如し。かゝれば魏晉六朝の間に漸次其基を固めたる佛教は益其勢を加へ、唐初に到りては前後十三宗の分立を見、高僧名徳踵を接して出で支那佛教の全盛時代を現出せり。善導大師は隋末に生れ、唐の太宗、高宗の世に道化を布かれしかば、時恰かもこの全盛時期に際し、各宗林立、碩徳名匠競ひ起るの間に、念佛門を唱へ、淨土の門嶄然頭角を洛陽の中心に顯はしたり。天臺には章安、智威の二祖、華嚴には杜順、智儼、賢首の三祖、禪宗には道信、

弘忍の二祖法相には玄奘、慈恩の二祖律宗には道宣、懷素、法蘊の三祖等皆大師の當代に輩出したりしかば、智解縱横、法幢相接して三學具備せざる無し、唯夫れ眞言の一宗、大師の没後に渡來して當時に光彩を添へざりしも、攝論宗の如きは、殊に隆盛を盛め、嘉祥大師の新三論また頗る勢威を張れり。されば各宗の碩學各所信を確守し、高下勝劣の爭議を生ずるは勢の然らしむる所にして、念佛門も亦此に至りて頗る異解者の擾亂する所となれり、大師の靈腕を籍るに非ずんば淨土の正義存廢未だ知るべからず。大師乃ち奮然として起ち、證を三世十方の諸佛に乞ふて『觀無量壽經』の疏四卷を製し、古今指定の大業を成せり、大師自から當時の情願を述べて『散善義』の末尾に記るし、結して曰はく此義已請證定竟、一句一字不可加減

欲寫者一如經法應知と、此に於てか弘願眞實の法門昭々乎として千歳を照し、佛經の眞意炳然として凡衆の眼を射る、高祖絶嘆じて善導獨明佛正意と曰へるもの實に所由あり、偉なるかな古今指定の釋功や。かゝれば善導大師發揮の教義には他師の謬解を正したるもの多く、或は所被の機を謬りて大小の聖人とするを斥け、或は別時意とて念佛は直ちに淨土に生るべき法に非ずと云ふの非を明にし、又は彌陀の佛身佛土を判して下位とするの誤を破する等を主として、其他枚舉すべからざるものあり。故に本師の教義を詳にせんと欲する者は須からく當代諸家の學說を究めざるべからず。

凡そ、本師の著書、祖典收むる所五部九卷あり、『觀經立義分』一卷、『觀經序分義』一卷、『觀經定善義』一卷、『觀經散善義』一卷

これ觀經四帖の疏と稱す此の外「法事讚」二卷「觀念法門」一卷「往生禮讚」一卷「般舟讚」一卷これなりこの四部を稱して其疏と稱す古今指定は正しく四帖疏に在り餘の四部は其の義を助顯せし者と見つべきなり。是等の書に就て、主要なる教義の二三を擧ぐべし。

要弘廢立

(一) 要弘廢立 道綽禪師「安樂集」に於て聖淨二門の判釋を下し外一代に對する教判は此に盡くされたれば應さに進んで門内の眞假を甄別すべきなり「安樂集」既に萬行一行の相對を以て勝劣を定めたるありと雖も其義從容なれば善導大師乃ち要門弘願の目を設けて此義を判明せられたり即ち要門といふは淨土門中の自力法にして、聖道の根機を導きて淨土の眞實法に入らしめんが爲め施設的教門なり弘願といふは淨土門中の純他力法に

して彌陀本願の正意を開示する眞實教なり而して「觀無量壽經」は初め偏に要門を説て以て淨土未熟の機を誘引し終に至てその要門を廢して弘願を顯示したり即ち要門より弘願に轉せしむるの目的を以て説かれたる經なるに當時の諸師多くその經意に達せず觀念を宗とせる廻向願生の經なりとし直ちに凡夫往生を教ふるの法に非ずとなせしを本師深く經意の所在を察して經末に唯佛名をのみ付屬せられたるに着目し要門方便弘願眞實の旨を斷定し「觀經」は觀佛と念佛とを宗とすれども佛意の歸する所は念佛の一法に在ることを明にせられたり「散善義」に上來定散の益を説くと雖佛の本願の意に望むるに衆生一向に専ら彌陀佛名を稱するにありと曰へるこれなり。「和讚」にこの意を述べて曰はく

正雜助正

釋迦は要門ひらきつゝ、定散詣機をこらしへて、  
 正 雜 一 行 方 便 ひとへに專修をすゝめたり、  
 (二)正雜助正、『散善義』に「行に二種あり一に正行二に雜行」と云へり、正行とは専ら往生經に依りて行するものにして、此中に讀誦、觀察、禮拜、稱名、讚嘆、供養の五種あり、この外往生經によらざる種々の行業も亦回向すれば淨土に生ずることを得れども、これ正しき淨土の行にあらざるが故に、これを雜行と名くるなり。『和讃』に曰はく  
 淨土の行にあらぬをば、ひとへに雜行となづけたり。

而してこの五種正行の中、また、正定業と助業とを區別して、一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず念々捨てざるものは、是を正定の業と名く若

し禮誦等に依らば、即ち名けて助業と爲すと云へり即ち第四の稱名を、正定業と爲し、前の三と後の一とを助業と爲すなり、助業と云ふは、助は助件の意義にして、自然稱名に附隨するの行業を謂ふ、往生の因種を資助するの謂にはあらざるなり、此助正の區別を知らずして、共に皆往生の因種に擬して修するを、高祖大師は雜修と名く、かゝる行者は佛願の正意に順はざるものなれば、則ち報恩の念あることなし。『和讃』は此意を述べて

助正ならべて修するをは、すなはち雜修となづけたり、一心をえざるひとなれば、佛恩報ずること、ろなし。と云へり、またたとひ名號を主として修しつゝも、以て現世の祈願に用ゆるが如き、亦雜修と名けたり、すべて雜修の行人は往生を得ること殆んど難し、これを千中無一と

云ふ。『和讃』に曰はく

佛號むねご修すれども、現世をいのる行者をば

これも雑修と名けてぞ、千中無一ときらはるゝと。

是れ皆な善導大師の幽旨を開顯せられたるなり。

二種深信

(三)二種深信 二種深信の釋は、是れ亦『散善義』に出でた

り。『觀無量壽經』に説かれし、九品往生の通因たる三心の、

第二深心を釋するに、七種の深信を立てられたる中の初

の二種是なり、その文に曰く、一には決定して深く自身は

現に是罪惡生死の凡夫、曠劫より已來常に没し常に流轉

して、出離の縁あることなしと信ず、二には決定して深く

彼阿彌陀佛の四十八願は、衆生を攝受し、疑ひなく慮りな

く彼願力に乗じて、定て往生を得と信ず、是を機法二種

深信と名くるなり、『和讃』に之を述べて、

煩惱是足と信知して 本願力に乗ずれば

すなはち穢身すてはて、法性常樂證せしむ

と曰へり、抑此二種深信は、二個の別心あるに非ず、たゞ是

たとひ罪業は深重なりとも、阿彌陀如來は必ずすくひま

しますべしと信ずる心相を、詳にしたるものにして、二種

共に歸命の一念に具はれば、學者呼んで二種一具と云ふ。

要するに自力全く盡て、他力に乗托したる心相を二種深

信とするなり。然るにこの二種の深信は、九品往生の通

因なれば、最下の惡機も極上の善機も、皆悉く自力功なく

唯佛願力に乗じて、報土の往生を得るなり、是に於て他力

弘願の旨趣、炳焉として火を覩るが如し。『和讃』に

願力成就の報土には 自力の心行かなはねば

大小聖人みなながら 如來の弘誓に乗ずなり

と曰へるの意を述べられたるものなり。大師はこの弘願の信心を守護せんとして、更に二河譬の巧釋を設けられたり。この譬喩は、人ありて種々の迫害に苦しめられ、逃れて空曠の平野に至りしが、忽ち前途に南北に流れたる火水の二河あり、若し是を渡らざれば身を免るゝに途なく、煩悶措く所を知らざるに、忽ち火水の間、幅僅かに四五寸ばかりなる東西に通ずべき一道を認め得たり、然るにその道狭小にして、且つ火水交々侵せば、容易に渡るべくもあらず、既にして群賊悪獸來り逼りて進退維れ谷まる、此の人乃ち思惟すらく、我今廻るも死せん住まるも亦死せん去るも亦死せん、寧ろ此道を尋ねて去らんと、此念をなす時に當り、東岸上に人の勸むる聲あり、曰はく、此の道を尋ねて行け、必ず死難なからんと、又

西岸上に人の喚ぶ者あり、汝、一心正念にして直ちに來れ、我れ能く汝を護らん、すべて水火の難に墮せんことを恐るゝ勿れと、此の人、この兩者の言を聞て、また疑退の心無く直に進前せり、然るに行くこと一分二分にして、種々の誘惑者ありて呼び返さんと試みしも、此の人更に顧みる所なく、須臾にして西岸に達し、幾多の善友に會して快樂極まり無きを得たりと云ふにあり。これ今日我等の種々の學術宗教の誘惑と、煩惱惡業の迫害を免れ、釋尊の發遣と彌陀佛の招喚とに信順して容易に涅槃の樂果に到るを得るに喩へ、この外また要法の存する無きを示したるなり、恐らくはこれ大師自己造詣の徑路を告げられし者なるなからんや、高德眞に仰ぐべきなり。要するに淨土教に於て、要弘二門を判し往生行に就て正

雜二行を分ち而して二種の深信を説て以て弘願の信相を詳にしたるもの是を善導大師の功勳とす、眞宗の選で以て第五祖と爲す所以此に在るなり。

要文拔萃

然衆生障重、取悟之者難明、雖可教益多門、凡惑無由徧攬、遇因韋提致請、我今樂欲往生安樂、唯願如來教我、思惟教我、我正受、然娑婆化主、因其請故、即廣開淨土之要門、安樂能人顯彰別意之弘願、其要門者、即此觀經定散二門是也、定即息慮以凝心、散即廢惡以修善、廻斯二行求願往生也、言弘願者、如大經説、一切善惡、凡夫得生、莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲增上緣也、乃至仰惟釋迦此方發遣、彌陀即彼國來迎、彼喚此遣、豈容不去也。(玄義分三)

四帖疏要文

今此觀經、即以觀佛三昧爲宗、亦以念佛三昧爲宗、一心廻願往生淨土爲體、乃至今此觀經、菩薩藏收頓教攝(全六)

問曰、願行之義有何差別、答曰、如經中説、但有其行、行即孤亦無所至、但有願願即虛、亦無所至、要須願行相扶、所爲皆剋、乃至今此觀經中十聲稱佛、即有十願、十行具足、云何具足、言南無者、即是歸命、亦是發願、廻向之義、言阿彌陀佛者、即是其行、以斯義故、必得往生、乃至但能上盡一形、下至十念、以佛願力、莫不皆往、故名易也。(全十六以下)

問曰、彼佛及土、旣言報者、報法高妙、小聖難階、垢障凡夫、云何得入、答曰、若論衆生垢障、實難欣趣、正由託佛願以作強緣、致使五乘齊入。(全廿一)

此明夫人真心徹到、厭苦娑婆、欣樂無爲、永歸安樂、但無爲之境、不可輕爾、即階苦惱娑婆、無由輒然得離、自非發金剛

之志永絕生死之元若不親從世尊何能勉斯長嘆

(序分義二十五)

正明夫人別選所求此明彌陀本國四十八願願々皆發增上勝因依因起於勝行依行感於勝果依果感成勝報依報感成極樂依樂顯通悲化依於悲化顯開智慧之門然悲心無盡智亦無窮悲智雙行即廣開甘露因茲法潤普攝群生也諸餘經典勸處彌多衆聖齊心皆同指讚有此因緣致使如來密遣夫人別選也(全二十七)

又讚云歸去來魔鄉不可停曠劫來流轉六道盡皆逕到處無餘樂唯聞愁嘆聲畢此生平後入彼涅槃城(定善卷八)

佛告阿難下至除苦惱法已來正明勅聽許說乃至明娑婆化主爲物故住想西方安樂慈尊知情故則影臨東域斯乃二尊許應無異直以隱顯有殊正由器朴之類萬差致使互

爲郢匠言說是其時者正明就此意中即有其七一明告勸二人時也二明彌陀應聲即現證得往生也三明彌陀在空中而立者但使廻心正念願生我國立即得生也問曰佛德尊高不可輒然輕舉既能不捨本願來應大悲者何故不端坐而赴機也答曰此明如來別有密意但以娑婆苦界雜惡同居八苦相燒動成違返詐親含笑六賊常隨三惡火阮臨臨欲入若不舉足救迷業繫之牢何由得勉爲斯義故立撮即行不及端坐以赴機也(定善義十九)

欲顯諸佛三身同證悲智果圓等齊無二端身一坐影現無方意赴有緣時臨法界言法界者有三義一者心徧故解法界二者身徧故解法界三者無障礙故解法界正由心到故身亦隨到身隨於心故言是法界身也言法界者是所化之境即衆生界也言身者是能化之身即諸佛身也言入衆生



心想中者、乃由衆生起念願見諸佛、佛即以無礙智知、即能入彼想心中現、但諸行者若想念中若夢定中見佛者、即成斯義也、三從是故汝等下至從心想生已來、正明結勸利益、此明標心想佛、但作佛解從項至足、心想不捨、一一觀之、無暫休息、或想頂相、或想眉間白毫、乃至足下千輪之相、作此想時、佛像端嚴相好具足了然、而現乃由心緣一相故、一一相現、心若不緣衆相不可見、但自心想作即應心而現、故言是心即是三十二相也、言八十隨形好者、佛相既現衆好皆隨也、此正明如來教諸想具足觀也、言是心作佛者、依自信心緣相如作也、言是心是佛者、心能想佛、依想佛身而現、即是心佛也、離此心外更無異佛者也、言諸佛正徧知者、此明諸佛得圓滿無障礙智、作意不作意、常能徧知法界之心、但能作想、即從汝心想而現似如生也、或有行者將此一門之

義作唯識法身之觀、或作自性清淨佛性觀者、其意甚錯絕、無少分相似也、即言想像假立三十二相者、真如法界身、豈有相而可緣、有身而可取也、然法身無色、絕於眼對、更無類可方故、取虛空以喻法身之體也、又今此觀門等、唯指方立相、住心而取境、總不明無相離念也、如來懸知末代罪濁凡夫、立相住心、尚不能得、何況離相而求事者、如似無術通人居空立舍也。

（定善義二十三以下）

問曰、備修衆行、但能迴向皆得往生、何以普照唯攝念佛者有何意也、答曰、此有三義、一明親緣、衆生起行口常稱佛、佛即聞之、身常禮敬佛、佛即見之、心常念佛、佛即知之、衆生憶念佛者、佛亦憶念衆生、彼此三業不相捨離、故名親緣也、二明近緣、衆生願見佛、佛即應念現在目前、故名近緣也、三明增上緣、衆生稱念、即除多劫罪、命欲終時、佛與聖衆自來迎

接諸邪業繫無能礙者故名增上緣也。自餘衆行雖名是善。若比念佛者全非比較也。是故諸經中處處廣讚念佛功能。如無量壽經四十八願中。唯明專念彌陀名號得生。又如彌陀經中一日七日專念彌陀名號得生。又十方恆沙諸佛證誠不虛也。又此經定散文中。唯標專念名號得生。此例非一也。

（定善義廿七）

一者至誠心。至者真誠者實。欲明一切衆生身口意業所修解行。必須真實心中作。不得外現賢善精進之相。內懷虛假。貪瞋邪偽。奸詐百端。惡性難侵。事同蛇蝎。雖起三業。名為雜毒之善。亦名虛假之行。不名真實業也。苦作如此安心起行者。縱使苦勵身心。日夜十二時。急走急作。如灸頭然者。衆名雜毒之善。欲迴此雜毒之行。求生彼佛淨土者。此必不可也。何以故。正由彼阿彌陀佛因中行菩薩行時。乃至一念一剎

那三業所修皆是真實心中作。凡所施為趣求亦皆真實。

（散善義三）

二者深心。言深心者即是深信之心也。亦有二種。一者決定深信自身現是罪惡生死凡夫。曠劫已來常沒常流。轉無有出離之緣。二者決定深信彼阿彌陀佛四十八願攝受衆生。無疑無慮。乘彼願力。定得往生。

（全四）

仰願一切行者等。一心唯信佛語。不顧身命。決定依行。佛遣捨者即捨。佛遣行者即行。佛遣去處即去。是名隨順佛教。隨順佛意。是名隨順佛願。是名真佛弟子。

（散善義四）

次就行立信者。然行有二種。一者正行。二者雜行。言正行者。專依往生經行行者。是名正行。何者是也。一心專讀誦此觀經。彌陀經。無量壽經等。一心專注思。想觀。察。憶。念。彼。國。二。報。莊嚴。若禮即一心專禮。彼佛。若口稱即一心專稱。彼佛。若讚

歡供養即一心專讚嘆供養是名爲正。又就此正中復有二種。一者一心專念彌陀名號。行住坐臥不問時節久近。念念不捨者。是名正定之業。順彼佛願。故若依禮誦等。即名爲助業。除此正助二行。已外自餘諸善。悉名雜行。若修正助二行。心常親近。憶念不斷。名爲無間也。若行後雜行。心常間斷。雖可迴向得生。衆名疎雜之行也。

(全八)

又迴向發願。願生者必須決定真實。心中迴向願。作得生想。此心深信。由若金剛。不爲一切異見異學。別解別行人等之所動亂。唯是決定一心投正直進。不得聞彼人語。即有進退心。生怯弱。迴願落道。即失往生之大益也。(同九)

(同十)

又白。一切往生人等。今更爲行者。說一譬喻。守護信心。以防外邪異見之難。何者是也。譬如有人欲向西行。百千之里。忽然中路。見有二河。一是火河。在南。二是水河。在北。二河各闊百步。各深無底。南北無邊。正水火中間。有一白道。可闊四五寸許。此道從東岸至西岸。亦長百步。其水波浪交過。濕道。其火燄亦來燒道。水火相交。常無休息。此人既至空曠。迺處。更無人物。多有群賊惡獸。見此人單獨。競來欲殺此人。怖死直走向西。忽然見此大河。即自念言。此河南北不見邊畔。中間見一白道。極是狹少。二岸相去雖近。何由可行。今日定死無疑。正欲到迴。群賊惡獸漸漸東逼。正欲南北避走。惡獸毒蟲競來向我。正欲向西尋道而去。復恐墮此水火二河。當時惶怖不復可言。即自思念。我今迴亦死。住亦死。去亦死。一種不勉死者。我寧尋此道向前而去。既有此道。必應可度。作此念

時東岸忽聞人勸聲仁者但決定尋此道行必無死難若住即死又西岸上有人喚言汝一心正念直來我能護汝衆不畏墮於水火之難此人既聞此遣彼喚即自正當身心決定尋道直進不生疑怯退心或行一分二分東岸群賊等喚言仁者迴來此道險惡不得過必死不疑我等衆無惡心相向此人雖聞喚聲亦不迴顧一心直進念道而行須臾即到西岸永離諸難善友相見慶樂無已此是喻也次合喻者言東岸者即喻此娑婆之火宅也言西岸者即喻極樂寶國也言群賊惡獸詐親者即喻衆生六根六識六塵五陰四大也言無人空迥澤者即喻常隨惡友不值真知識也言水火二河者即喻衆生貪瞋如水瞋憎如火也言中間白道四五寸者即喻衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心也乃由貪瞋強故即喻如水火善心微故喻如白道又水波常濕道者即喻

愛心常起能染汚善心也又火燄常燒道者即喻瞋嫌之心能燒功德之法財也言人行道上直向西者即喻迴諸行業直向西方也言東岸聞人聲勸遣尋道直西進者即喻釋迦已滅後人不見由有教法可尋即喻之如聲也言或行一分二分群賊等喚迴者即喻別解別行惡見人等妄說見解迭相惑亂及自造罪退失也言西岸上有人喚者即喻彌陀願意也言須臾到西岸善友相見喜者即喻衆生久沈生死曠劫淪迴迷倒自纏無由解脫仰蒙釋迦發遣指向西方又藉彌陀悲心招喚今信順二尊之意不顧水火二河念念無遺乘彼願力之道捨命已後得生彼國與佛相見慶喜何極也

(散善義十以下)

三心既具無行不成願行既成若不生者無有是處也

(同十二)

明所聞化讚但述稱佛之功我來迎汝不論聞經之事然望佛願意者唯勸正念稱名往生義疾不同雜散之業。

（同廿五）

問曰如四十八願中唯除五逆誹謗正法不得往生今此觀經下品下生中簡謗法攝五逆者有何意也答曰此義仰就抑止門中解如四十八願中除謗法五逆者然此之二業甚其障極重衆生若造直入阿鼻歷劫周障無由可出但如來恐其造斯二過方便止言不得往生亦不是不攝又下品下生中取五逆除謗法者其五逆已作不可捨令流轉還發大悲攝取往生然謗法之罪未爲又止言若起謗法即不得生此就未造業解也若造還攝得生云云（同二十七以下）

若能相續念佛者此人甚爲希有更無物可取方之故引分陀利爲喻言分陀利者名人中好華亦名希有華亦名人中

上上華亦名人中妙好華此華親傳名蔡華是若念佛者即是人中好人人中妙好人人中上上人人中希有人人中最勝人也。

（同三十一）

正明付屬彌陀名號流通於遐代上來雖說定散兩門之益望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名。（同三十二）竊以真宗巨遇淨土之要難逢欲使五趣齊生是以勸聞於後代但如來神力轉變無方隱顯隨機王宮密化云云

（同三十二）

如觀經說具三心必得往生何等爲三一者至誠心所謂身業禮拜彼佛口業讚嘆稱揚彼佛意業專念觀察彼佛凡起三業必須真實故名至誠心二者深心即是真實信心信知自身是具足煩惱凡夫善根薄少流轉三界不出火宅今信知彌陀本弘誓願及稱名號下至十聲一聲等定得往生乃

至一念無有疑心故名深心三者廻向發願心所作一切善根悉回願往生故名回向發願心具此三心必得生也若少一心即不得生如觀經具說

（往生禮讚二）

諸佛所證平等是一若以願行來收非無因緣然彌陀世尊本發深重誓願以光明名號攝化十方但使信心求念上盡一形下至十聲一聲等以佛願力易得往生是故釋迦及以諸佛勸向西方為別異耳

（同四）

若能如上念念相續畢命為期者十即十生百即百生何以故無外雜緣得正念故與佛本願得相應故不違教故隨順佛語故若欲捨專修雜業者百時希得一二千時希得三五何以故乃由雜緣亂動失正念故與佛本願不相應故與教相違故不順佛語故係念不相續故憶念間斷故回願不懇重真實故貪瞋諸見煩惱來間斷故無有慚愧懺悔心故懺

悔有三品一要二略三廣如下具說隨意用皆得又不相續念報佛恩故心生輕慢雖作業行常與名利相應故人我自覆不親近同行善知識故樂近雜緣自障障他往生正行故何以故余比日自見聞諸方道俗解行不同專雜有異但使專意作者十即十生修雜不至心者千中無一此二行得失如前已辨

（全五）

彌陀經及觀經云彼佛光明無量照十方國無所障礙唯觀念佛衆生攝取不捨故名阿彌陀彼佛壽命及其人民無量無邊阿僧祇劫故名阿彌陀

（全七）

又如無量壽經云若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現在成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生

（全四十四）

第三節 善導大師已後の浄土教

善導大師已後の浄土教義

懷感禪師

支那の浄土教は、善導大師を待て、從來の謬見を措定し、眞正の義趣を開顯せられたるが、大師の滅後その感化を傳へたるものを、懷感禪師・法照禪師・少康法師の三人とす。懷感禪師は、唐京師千福寺に住し、その本宗は法相宗なり、初め念佛往生に就いて疑團を抱き、遂に善導大師に謁して解決を求む、大師告て曰く念佛往生豈に魔説ならんや、子若し之を信じて至心に念佛せば當に證驗あるべしと、禪師乃ち道場に入りて、三七日精修せしに靈瑞を見る能はざりしかば、その罪障の深きを恨み絶食して死せんとせしに、善導大師之を許さず、猶ほ續て精修せしめしに、遂

に靈相を感見し念佛三昧を證せり、臨終には化佛の來迎を得て合掌西に向て往けりと云ふ。

禪師の著述に『釋羣疑論』七卷あり、その中に『菩薩處胎經』に説ける所の懈慢國に就て雜修の者は執心不牢の人なり故に懈慢國に生ず、若し専ら念佛を修すれば、執心牢固にして定て極樂に生するなりと釋顯せり、是れ日本源信僧都の爲めに報化辨立の法門を闢けるものと謂ふべし、然るに禪師はその本宗の教理に於て未だ全く窠臼を脱すること能はず、佛と衆生の關係に就きて、猶ほ唯識所變の見解を持せしに因り、未だ善導大師の眞意に契はざるものあり、是を以て法然聖人は師資相違是多しと評し、高祖大師は之を祖師の列に加へられざるなり、然りと雖も懈慢界の釋は眞宗に於てはその功勳少しとせず、故に『和讃』

にその名を擧げて

本師源信和尚は

處胎經をひらきてぞ

懷感禪師の釋により  
懈慢界をばあらはせる

と頌述せり。

法照禪師

法照禪師は何許の人なるを知らず、唐の大歴二年衡州雲峰寺に止れり、同四年湖東寺に於て五會念佛を修す、五會念佛とは五日を以て一會となし念佛を修するを云ふ、時に大晋竹林寺を感見して、文殊普賢等の諸菩薩に會ふ、文殊菩薩師に告て諸修行門念佛に如くはなし、阿彌陀佛の願力難思なり、汝當に念を繋て往生を決得すべしと云ひしとぞ、又并州に至りて五會念佛を修せしが、事代宗の聞く所となり、召されて宮中に入り、宮人を教へて五會念佛せしむ、代宗尊て國師となす、大歴七年寂す、世呼て善導大

少康法師

師の後身と稱す、著述は『五會法事讚』一卷あり。

少康法師は、初め洛陽の白馬寺に於て、善導大師の西方化導の文を得て感ずる所あり、遂に長安に至りて光明寺に詣し、善導大師の遺像を拜す、後化を布かんと欲して新定に至る、郡に入りて識る者なし、乃ち錢を乞ひ小兒を誘ふて曰く、念佛一聲せば一錢を與へんと、月餘にして孩孺皆念佛して錢を求む、師乃ち曰く念佛十聲せば一錢を與へんと、此の如きこと一年、少長皆念佛し聲道路に盈つ、後、烏籠山に於て淨土の道場を立つ、唐貞元二十一年寂す、世之を呼て亦善導の後身とす。

右法照少康の二師は善導大師の感化を傳へて他力念佛を修して、自行化他せられし人なれども、法門に就て特殊の發揮なければ、高祖大師は之を善導の後身として、別に



立て、以て祖となさず『和讃』に

世々に善導いでたまひ 法照少康としめしつゝ

功德藏をひらきてぞ 諸佛の本意とげたまふ

と讃述して特に法照少康の名を出だしたるは蓋しその

善導の感化を傳へられしを嘉みしたるものなり。

慈愍三藏

已上三師の外慈愍三藏あり、是亦念佛の名徳にして『選擇集』浄土血脉の中にその名出でたれども著述傳らざれば、

その教義の如何を知るべからざるなり。

抑唐朝以降、浄土の教義盛に諸宗の間に起りて高僧碩徳、及賢士名大夫の念佛して、西方に願生せしもの殆ど枚擧すべからず、其中唐に於ては憬興あり、飛錫あり、宋に至ては慈雲の蓮式あり、桐江の擇映あり、その他元照戒度、用欽あり、已上眞宗典籍中に其名を出たる人を擧ぐ此等諸師の念佛は善導大師とそ

の系統を異にし未だ他力の眞髓を得ざるものなりと雖も、その著述に於て説く所は亦眞宗教義の羽翼たるべきものなきに非ず、明の雲棲藕益に至ては發揮頗る多し、然るに、日本浄土教は善導大師より傳承せしものにしてその後の念佛教義とは直接の關係を有せざるものなれば今は委く述せざるなり。

第五章 源信僧都

第一節 源信僧都以前の念佛

日本に於ける念佛は聖徳太子に創まると謂ふべし、太子の著述としては浄土教に關するものなると雖も、自身の行業として常に念佛し西方往生を願はれしことは法隆

源信僧都以前の念佛  
聖徳太子

寺三尊光背の銘によりて徴すべし。  
本邦に於て淨土經を講じたる最初として、史に徴すべき  
は慧隱の『無量壽經』の宮講是なり。佛教渡來後八十九年  
舒明天皇十二年佛滅後千九百十九年皇紀千三百年五月五  
日宮中に大齊會を設け慧隱法師をして『無量壽經』を講ぜ  
しむ、慧隱は曩に入唐留學し、昨年九月新羅の使に従つて  
歸朝したり、超えて十二年孝德天皇白雉三年、再び宮中に  
『無量壽經』を講ず、惠資を論議者と爲し、僧一千人を聽衆と  
爲しき、盛況想ふに堪えたり。以て淨土教義鼓吹の濫觴  
と見つべし。

此後久しからずして三論の名匠智光禮光の二師あり、智  
光法師『淨土論註』を著はす、蓋し本邦淨土教章疏の權輿な  
り。智光は河内の人なり、禮光と共に元興寺に住し、智藏

智光禮光兩法  
師

の門下に三論の深旨を究む。禮光末年に及びて、總て言  
語を禁じ精修する所あり、智光故を問ふも渾て答ふる所  
なかりしが數歳にして逝きぬ。智光追想して措かず、そ  
の生處を知らんことを望みしに、一夕夢に禮光の所に至  
る、禮光曰はく是れ極樂なりと、延て本佛に見えしむ、智光  
覺めて後、佛掌中の淨土を圖畫す、是を本邦最初の淨土曼  
荼羅とすこれより常に淨土を欣び、觀念怠ることなかり  
き。

かくて念佛の教義は漸く道俗の間に傳はりて、光明皇后  
の如き殊に歸仰せられたり、然れども教義史上主要なる  
發達の見るべきなし。

平安朝に入りて、日本佛教の機運一轉し、最澄・空海二大師  
の開宗となりて、淨土の教義も、大に勢力を加へたり。弘

密宗の念佛

天臺の念佛

法大師は密教念佛を唱道し之に關する著作數部あり爾來眞言一流の願生者相繼いで出で、以て後世に傳はれり。然るに後世念佛門の勃興を促せし主要なる源流は、傳教大師によりて開かれたる比叡山の常行三昧これなり、常行三昧の修行は支那に在りても、天臺一流の念佛者を出だし、善導一流と相對峙せしが、本邦に在りても亦同じく、よりて以て淨土教を發展せしめたり。嵯峨天皇弘仁九年佛滅後千二百九十七年皇紀千四百七十八年七月廿七日傳教大師四種三昧を分ちて、門下に配屬し、慈覺大師をして堂坐三昧堂を創建せしむ、慈覺大師此に在りて三昧を修すること六年、後ち承和五年唐に入り同十五年歸朝の後、新に常行三昧堂を建て、仁壽元年五臺山念佛三昧の法を移し諸弟子に傳ふ、昔日法道和尚定中に在りて極樂に

慈覺大師の常行三昧

相應和尚

往き、親しく聞き得たる水鳥樹林念佛の聲調を傳へて之を五臺山に流布せり、慈覺大師在唐の日、親しく五臺山に詣で、一夏の間其の音曲を學び、此に叡山に傳へられたるなり、これより、常行堂聲明の法を傳承し、後良忍上人に至りて殊に妙趣を極めたり、本邦の聲明業多く是を祖とす。想ふに餘音嫋々の間、如何に當代の人心を歸仰せしめしか、蓋し大に念佛の弘布に資くる所ありしならん。慈覺大師は清和天皇の貞觀六年を以て寂す、其の門下相應和尚遺命を奉じて全七年八月十一日或は曰ふ貞觀六年始めて不斷念佛を常行堂に修せり、相應和尚は無動寺の創立者なり。かくて台山の一角、不斷念佛の聲、絶へざりしかば、師資相傳へて願生を要行となせし者頻々として繼承せり。

延昌僧正

相應和尚の後、座主延昌僧正あり、姓は沓御氏、加賀の人なり、朱雀村上二帝の師たり。常に門下に語つて曰はく、我命終の前三七日、不斷念佛を修せん、其の終の日、即是れ我滅時なりと、應和三年十二月廿四日、門下をして念佛を唱へしめ、佛滅後千四百四十三年正月十五日沐浴淨衣念珠を持ち定印を結びて死す、年八十五諡して慈念と言ふ。而して有名なる念佛者空也上人は師の門下に出でたり。

空也上人  
空也上人、名は光勝、姓氏を言はず、或は醍醐帝の子と稱し、又、常康親王の子と云ふ、沙彌たるの時、自から空也と稱し、人又其の名を呼はずして空也と云ふ。少きより周遊を好み、足跡殆んど天下に遍し、過ぐる所多く、利濟を爲し、道を修め、險を夷け、橋を架し、無水の地には多く井を穿てり

その常に彌陀を唱へしを以て、井を彌陀井と名け、往々にして後世に傳はれり、また荒原を過ぎて遺骸に逢ふことある毎に、一處に拮聚して、彌陀名を念し、油を灌いて焼きぬ。弱冠にして尾張の國分寺に薙髮し、天慶元年京都に入り、市廛に於て念佛し人を勸化せしかば、人呼びて市上人と爲しき。天曆二年四月、天臺に上り、延昌僧正に従て得度す。同五年、京畿疫ありて、死屍相枕するに至る、空也上人十一面大悲像を刻し、寺を建つ、六婆羅密寺是なり。嘗て老鍛工あり、出要を問ふ、乃はち念佛を以て之に授けしが、工歸途にして、賊に逢ひければ、潜かに彌陀を念せしに、賊見て曰はく、空也上人なりとて捨て去りぬ、その時衆の歸向する所となりしこと、以て知るべし、念佛を勸むるに、拱手舞踏、以て老幼を導きしかば、時人呼んば踊念佛と

云ふ六齊念佛是より始る。天祿三年佛滅後千三百五十一年西紀九百七十二年九月十一日寂す。終に臨んで門人に語て曰はく聖衆來迎空に滿てりこ語り己りて絶ゆ、手中の香爐傾かず年七十。史家嘆じて曰はく天慶の前念佛の人希なり也公此の時に出て、黔首の民を鼓し市廓の佛子を倡す方今孩嬰稚兒戲謔悲彌陀を以て口號と爲さる無し、これ師教化の遺ありと蓋し民間の念佛は師を待ちて盛なりしなり所謂平民的布教の嚆矢とも謂つべき歟。

延昌僧正の時慈慧大師良源大僧正あり元三大師又は「九品往生義」を著はし、その臨終のときには彌陀を唱へて化せり。我弟六祖源信和尚は實に此の門下より出でたるなり。

慈慧僧正

案するに吾邦の淨土教は上述の如くその由來頗る遠し、然るに源信僧都以前に在ては之を唱ふる者多くは皆自宗の教理を準則とす、即ち三論宗の人は三論宗の教理を以て念佛を解釋し、天臺宗の人は天臺宗の法門を以て淨土を説明せり、されば専ら觀念々佛を主として稱念本願の正意を知らず、多くはこれ廬山流の系統に屬する者にして善導派の念佛にはあらざりしなり、善導流の念佛を唱道せし者は、吾邦に在ては源信僧都を以て其の最初となす。

第二節 源信僧都の傳

源信僧都姓は卜部氏、大和國葛下郡當麻郷の人なり、父は

源信僧都の傳

正親母は清原氏、朱雀天皇天慶五年佛滅後千四百二十一年西紀千六百四十二年生る。幼にして天性穎悟風姿秀徹なり、七歳にして父を喪ふ、父遺命して曰はく、汝必ず出家して道を修め、以て我冥福を祐けよと、爾來日夜之を念ふて措かず、日々郡の高尾寺の大悲の像に詣づること三年、手埵の瓦塔一千基に満ちぬ。嘗て夢らく、高尾寺に詣でしに藏中、大小明暗の數多の鏡あり、一僧その小にして暗き者を取り師に授けて曰はく、横川に到りて之磨けと覺て後甚だ怪む、母曰はく、これ他日心鏡を磨瑩して智明を炳發するの端なるなからんやと、師聞て心竊かに喜び大に期する所ありしと云ふ。偶々叡山の一僧、此地に來り、その奇智に感じ、母に乞ふて伴ひ歸り、當代の名匠慈惠僧正良源の門に屬す、別に母臨み新衣を裁して師に與へ、嚴乎

として告げて曰はく、汝謹んで良源上人の教を奉じ、孜孜分陰をも空しくすること勿れ、他日學成り名海内に加はるに到らば、我乃はち汝を召すべし、然らざればこれ永世の訣別なり、決して母を憶ふて道を怠ることあるべからずとて、父の常に奉持せし錦囊の『阿彌陀經』一卷を付す、嗟乎一母一子將に東西に別れんとす、其情豈切ならざらんや、しかも訓戒嚴として霜の如し、師泣て之を受け、慨然天台の峯に上る。

十三歳にして祝髮受戒し、法諱を源信と云ふ、切瑳頗る眼勉、學業大に進み、村上天皇天曆十年六月、年僅かに十五、勅を受けて八講師となり、名聲宮中を聳動す、帝嘉賞して布帛を賜へり。師乃はち故郷の母を慰めんと欲し、恩賜の布帛を餽る、母受けず、誠めて曰はく、天眷の榮これ何ぞ母

の志ならんや、名利畢竟何者ぞや、彼れ増賀上人の如くなりてこそ、能く父母をも救ふべけれ、吾れ既に老ひたり、生きて汝の成業を見ること恐らくは難からんと、師其の志に激せられ、これより益々業行を積み、天録中横川に屏居し、戒節愈嚴なり、一日勸進往生偈を作りて母に寄せ、安樂の願生を勧められたり、辭句最も凱切なり。

永觀元年、師年四十二歳、始めて郷に歸りて母を觀る、是より先き數々書を致して歸省を乞はれしか、母許さず、此に至りて切情禁ずべからず、許を得ずして發足せられしが、途にして母の招書を得、その病報に接し、急行して暮夜門に達す、母喜び且つ泣て曰はく、嘗て師を召さんことを約せしは正に此時なり、幸に相見る何の宿縁ぞや、我今將に逝かんとす、乞ふ臨終の知識たれと、師念佛の功德、淨土

の莊嚴を説き、室を淨めて彌陀の像を安じ、自から磬を鳴して唱首となり、念佛を勸む、終に臨んで念佛三百餘遍、身心安詳にして瞑しぬ。師深く嘆じて曰ふ、我をして此に至らしめし者は母なり、母をして終をよくせしめし者は我なり、母子互に善友たり、蓋し宿契ならくのみと。後世傳へて美談とす。

師、嘗て六波羅密寺の光勝上人に見えて、我淨土の願生、果たし得べきや否やを問ふ、光勝上人は空也と稱して念佛の弘通に専らなりし人なり、答へて曰はく、六行觀の力すら尙ほ能く無想定に至るに非ずや、厭欣眞に切ならば西歸何ぞ遂げざらんやと、師以て至言となす。永觀二年十一月、『往生要集』の稿を起し、明年四月成る。圓融天皇の后師に乞ふて、『往生要集』の畫を作らしむ、師入定七日、畫工に

命じて之を圖せしめ、良源・覺運・覺超の諸師各其上に賛し以て奉ず、帝及后大に欣んで紫宸殿に安ぜられしが、深夜に至りて鬼哭啾々、後宮皆怖る、因りて歸し賜はりしと云ふ、十界の圖と稱する者是なり。寛和二年正月「往生要集」一部を宋の臺州周文徳に寄贈せられしが、文徳是を天臺國清寺に付し、藏中の經架に列せしと、宋主また之を讀んで欽慕措く能はず眞像を求め來りしかば、師自から畫きて贈られたり。此の書世に傳はるに及びて朝野風靡してその化導に向ひ、眞佛復た出でぬと稱せしと云ふ。良源僧正の門下高弟七十餘、中に就て師及び覺運の二人最も名あり、後覺運和尚と並び馳せて横川流、檀那院流の學統永く相對峙するに至れり。長保二年八月弟子寂照宋に行くに會し、天臺教義二十七問を設けて四明の知禮

法師に問ふ、知禮法師は天臺第十七祖にして、山外の異義を排し、臺宗正統の教義を開顯したる希世の名徳なり、問書を得て深く嗟嘆し、答釋を造りて之に報す、これより音信相繼げりしといふ。横川に屏居するや、専ら著述を事とし、「一乘要訣」「往生要集」「彌陀經畧記」「觀心略要」「對俱舍鈔」「因明四相違注釋」等七十餘部、百五十卷あり、並に世に行はる。天臺の教法此時を以て隆盛を極めたり。

寛仁元年疾あり、終に臨んで懇に弟子の疑義を解決し、上足慶祐に告ぐるに、觀音大士の來迎あることを以てし、定印を結び、端坐して念佛し、偈を誦して化す、六月十日なり、世壽七十六皇紀千六百七十七年・佛滅後千、師少かりしより終に至るまで淨業を勤修じて、少くも懈廢せず、自記に曰はく、一生の念佛總計二十俱胝返なりと、勵修以て知るべ



し、又佛像を彫畫し千體の佛を作りて諸州に領安するもの凡そ三十八所、其餘傳持するもの殆んど海内に遍し。

### 第三節 源信僧都の教義

源信僧都の教義

源信僧都の著書頗る多く、淨土教義に關する者も亦少なからず。雖も、本宗の祖典として取る者は『往生要集』一部六卷なり、此の書は永觀二年冬十一月に稿を起し、翌寛和二年夏四月滅後千四百六十四年皇紀千六百四十五年に成れり。抑源信僧都は台宗常行三昧の軌儀より出で、盛に念佛を事とせしが、身横川に在りて台宗の碩學たりしかば、其の化風、既に天台を捨てたる黒谷上人等の如くならず、從容の釋顯徐ろに念佛の眞義を光闡せられたり、これ機宜の當に然

るべき所なり。故に其著書の多くは、觀念を推尊して念佛を隨屬とする者の如く、『往生要集』すら遽かに之を見るときは眞實弘願の教義に非るが如きなり、源空上人の師叡空上人が、此の書を誤解して、師弟の間爭議を生じたり。傳ふるも、實に宜べなり、然れども審かに其始終を察し、意を得て之を見るときは念佛の奧義を闡いて道俗を勸進するに非るはなし、さればこそ黒谷上人此の書によりて念佛門に歸せられたれ。『往生要集』の開章に曰はく「夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり、道俗貴賤誰か歸せざる者ぞ」と又曰はく「是の故に念佛の一門に依りて、聊か經論の要文を集む、之を披き、之を修するに覺り易く行し易し」と、一部の主意蓋し此を出でざるなり、既に、覺り易く行し易きを以て主眼となす、その本意、觀念の難行に在ら

すして、弘願念佛の易行にあるや明かなり。故に『往生要集』の中には稱名念佛は作法によらずたゞ内心即ち信心を要とするの旨を示されたり。『和讃』にその文を述して男女貴賤ことごとく 彌陀の名號稱するに 行住坐臥もゑらばれず 時處諸縁もさわりなり 彌陀の報土をねがふひこ 外儀のすがたはことなりと 本願名號信受して 寤寢にわするゝことなかれと云へり。又觀經に依りて極重惡人の出要はたゞ念佛一法に在ることを示して『極重惡人無他方便唯稱彌陀得生極樂』と云へり。『和讃』には之を 極惡深重の衆生には 他の方便さらになし ひとへに彌陀を稱してぞ 淨土にむまるとのへ玉ふと述せり。又僧都は自身に寄せて念佛の利益を明して

『我も亦彼の攝取の中に在り、煩惱に眼を障へられて見たてまつらと雖も、大悲倦むことなく常に我身を照し玉へり』と曰はれしが『正信偈』には之を 我亦在彼攝取中 煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我 と云ひ、『和讃』には 煩惱にまなこさへられて 攝取の光明みざれども 大悲ものうきことなくて つねにわが身をてらすなり と云へり。 然るに僧都發揮の教義としては報化二土の判最も主要なり、今その大要を示すべし。 報化二土 報化二土とは阿彌陀如來の淨土中に於ける二種の區別なり、報土とは眞實報身として眞實の本願に

報化二土

酬報し給へる本佛の淨土なり、化土とは方便化身とて方便の願に酬報して現れ給へる化佛の淨土なり。此二種の淨土は、專修雜修の二種の行者の往生する處にして、專修念佛の行者は直ちに本佛の淨土に入るを得、雜修の行者は永く化佛の淨土に留まりて、久くして後初めて本佛の下に到るを得るなり、何故に然るか、これ專修の者は執心牢固とて深く彌陀の願力を信じて安心堅固なれども、雜修の者は執心不牢固とて信心堅固ならざればなり。善導大師の『散善義』に專修雜修の得失を示して專修の者は十即十生なれども、雜修の人は百中希れに一二を得、千中希れに三五を得と定め、往生の得不を示したりと雖も、未だ果報の優劣を擧示するに及ばざりき、今師に至りて前に述べたりし如く、初めて果報の優劣より得失を明に

せられたるなり。然るこの報化二土の判はも、懷感禪師の『群疑論』の中に出で、僧都はたゞ之を採用したるまてなれば強ち之を以て僧都の發揮となすべからざるもの、如くなれども、懷感禪師は善導大師の眞意を得たるものにあらず、隨てその報化の判も亦弘願法門の上には何等の功益をも與へざるなり、今僧都は善導大師の眞意を得て而して此の報化の判を採用して以て專雜の得失を示されたればその弘願法門に與ふる所の功勳は尠からざるなり、然らば之を以て僧都の發揮とするに於て何の不可か之れあらん、故に『正信偈』には

專修執心判淺深 報化二土正辨立  
と讚し『和讚』には

靈山聽衆とおはしける 源信僧都のおしへには

執化二土をおしへてぞ 專辨の得失さだめたる  
と述べられたるなり

要文拔萃

夫往生極樂之教行、濁世末代之目足也、道俗貴賤誰不歸者、但顯密教法其文非一、事理業因其行惟多、利智精進之人未爲難、如予頑魯之者豈敢矣、是故依念佛一門、聊集經論要文、披之修之、易覺易行。

（往生要集上本二）

又彼一一光明、遍照十方世界、念佛衆生、攝取不捨、我亦在彼攝取之中、煩惱障眼雖不能見、大悲無倦常照我身。

（同中本十三）

若有不能堪觀念相好、或依歸命想、或依引攝想、或依往生想、應一心稱念、乃至行住坐臥語默作作、常以此念在於胸

要集の要文

中、如飢念食、如渴追水、或低頭舉手、或舉聲稱名、外儀雖異、心念常存、念念相續、寤寐莫忘。

（同中本十三）

三業重惡、能障正道、故須護之、往生之業念佛爲本、其念佛心必須如理、故具深信至誠念三事。

（同中本十五）

問一切善業各有利益、各得往生、何故唯勸念佛一門、答今勸念佛、非是遮餘種種妙行、只是男女貴賤、不簡行住坐臥、不論時處諸緣、修之不難、乃至臨終願求往生、得其便宜、不如念佛。

（三下本二十一）

二、雙卷經三輩之業、難有淺深、然通皆云一向專念無量壽佛、三、四十八願中於念佛門、別發一願云乃至十念若不生者、不取正覺、四、觀經云極重惡人無他方便、唯稱念佛得生極樂。

（往生要集下本二十一）

問菩薩處胎經第二說、西方去此閻浮提十二億那由他、有

懈慢界國土快樂作倡伎樂衣被服飾香華莊嚴七寶轉開  
床舉目東視寶床隨轉北視西視南視亦如是轉前後發意  
衆生欲生阿彌陀佛國億千萬衆時有一人能生阿彌陀佛  
國上已以此經准難可得生答群疑論引善導和尚前文而釋  
此難又自助成云此經下文言何以故者由懈慢執心不牢  
固是知雜修之者爲執心不牢之人故生懈慢國也若不雜  
修專行此業此即執心牢固定生極樂國乃至又報淨土生  
者極少化淨土中生者不少故經別說實不相違也

### 第七章 源空上人

#### 第一節 源空上人以前の念佛

源空上人以前の念佛

抑本邦の念佛は其起原近からず殊に天台宗に常行三

昧不斷念佛の徒相繼ぎ念佛者の數甚だ多かりしも別に  
念佛の一宗を開きしは聖應大師良忍上人に始まる融通  
念佛宗即ち是なり

良忍上人は尾張國知多郡の人なり俗姓は藤原秦氏父は  
兵曹道武母は熱田大宮司の女なり後三條天皇延久四年  
佛滅後千五百五十一年皇紀千七百三十二年西紀一千七百三十二年富田に生る

歳十二にして叡山に登り良賀の門に入りて良忍と稱す  
學業絶倫叡山の講主となりしも徒らに學解に走りて修  
行の違なきを憂ひ二十三歳にして天台を辭し山城國愛  
宕郡大原に隠れ専ら淨土の業を勵みたり上人は叡山  
常行堂の堂衆として頗る聲明の秘妙を極めたりしかば  
哀婉の律呂よりて以て人衆の道念を喚發し歸向を集中  
したり日本聲明業の中興として後世斯業の徒皆上人を

祖とす。かくて常坐不臥道を修めて怠るなかりしが、行功二十餘年、永久五年五月十五日に至り、三昧中に阿彌陀如來を感見し、親しく融通念佛の示誨を受けたり。其語に曰はく、

一人一切人、一切人一人一行、一切行一切行一行、是名他力往生。と。

融通念佛

上人大に喜びて、此に融通念佛の宗義を創唱し、天治元年六月九日、管簿を携へて京都に遊化し、鳥羽上皇以下百官を勸化して融通念佛會に入らしめ、日課念佛を行せしむ、爾來諸國を延化し、錫を攝津國に留めしが、遂に此地を以て融通念佛の道場となす、今の大源山諸佛護念院大念佛寺と名くる同宗の本山即ち是なり。長承元年佛滅後千六百十一年二月朔日皇紀千七百九十二年西紀千百三十二年大原の來迎院に

寂せり。後桃園天皇の安承二年聖應大師と諡す。

所謂融通念佛の主旨は、一人の稱名したる功德は一切人に融通し、一切人の稱名したる功德は一人に融通し、恰かも一室内に於ける幾多の燈光が、互に相融通して相障えざるが如しと云ふに在り、故に十界一念、融通念佛億百万遍、功德遍満と言へり。されば本宗の教義は全く華嚴天台の教理を根基として念佛の功德を説くものにして、その安心は、自他念佛融通の道理を聞き、深く鎔融通徹の妙旨を領解して名簿に加名し、日課の稱名を行せんことを期し、その人會の時に當りて、自他の願行成就せりと信ずるに至り、起行には毎且西向合掌して、彌陀所傳、融通念佛、億百萬遍決定往生と唱へて、念佛すること十聲を以て度こなし、凡て正助二行ありて日課の念佛を欠かざるなり。

本宗所依の經論は全く他の淨土門と異にして、『法華』『華嚴』の二經を正依となし、淨土の三經は却りて傍依となす、且つ是等を所依となすと雖も、其根基は彌陀直授の偈文に求めて、この義を顯はすに最も適合せるが故に所依とするのみ、經ありて而して後、宗を立つるにあらざるなり、故に本宗は彌陀直授の法門と稱して三國の相承傳來を言はず。其他種々の異點ありて他の淨土門に同じからず、判教の如きも聖淨二門によらずして華嚴の五教を用ゐ、他力を談ずるにも彌陀願行の他力を言はずして自他融通によりて他力往生を立て、指方立相の淨土を立てざるに非ずと雖も、彌陀を性具の本佛とし、淨土の唯心の淨土と定めたり。

要するに此の宗の教義は聖道淨土の中間に位して、巧に

構成されたる者と謂つべし、これ念佛が古來の諸宗より漸く分離して別に黒谷一派の法門とならんとするの先驅とも謂つべく、過渡時期の現象應さに有るべきことなり。その後幾多の盛衰を經過し、第七世法明、第四十五世大觀の二師、最も弘布に力あり、故に良忍上人とこの二師をば開祖、中興、再興の三祖と稱す、目下第五十五世の法統を傳へたり。

永觀律師

良忍上人の當時永觀律師あり、姓は源氏、東大寺三論宗の名匠なりしが、晩年洛東禪林寺の故居に歸りて、交通を謝絶し偏に安養を慕ふ、又藥王院に於て丈六の彌陀像を作り淨業を修しき。性慈仁、常に獄に往て飢寒を問ひぬ、然るに身体羸弱病に罹ること多けれども、曾て修學を弛ふ

せず謂へらく病は善知識なり、我病苦に因りて進修を堅  
ふするを得たりと。長承元年十一月二日沐浴念佛中夜  
に至りて寂す年八十。恰かも良忍上人の示寂と同年な  
り。著書『往生十因』『彌陀要記』等ありて浄土教義を述す。  
その後珍海已講あり、是亦三論宗希世の碩學なりしが、『往  
生決定集』を著はし、以て浄土縁義を鼓吹せり然るに永觀  
珍海の二師の浄土教に於て善導大師を尊崇することを  
知れるは、源信僧都已前の諸師に一步を進めたるものと  
謂ふべしと雖も、亦未だ善導大師の眞意に徹透すること  
能はず、隨て源信僧都の念佛精神とその相去ること猶遠  
し、源信僧都已後に在て、始めて源信僧都の精神を發見し、  
善導大師念佛の眞意を開闡せしものは、源空上人是なり  
とす。

珍海已講

### 第二節 源空上人の傳

源空上人の傳

源空上人、姓は漆間氏美作國久米郡稻岡莊の人なり、父は  
時國、母は秦氏崇徳天皇長承二年佛滅後千六百六十二年  
皇紀一千七百九十三年四月七日を以て生る。頭圩くして  
西紀一千七百九十三年四月七日を以て生る。頭圩くして  
稜あり、眼黃にして光あり、性岐嶷幼にして舉止頗る衆に  
異れりき。保延七年の春、源定明なる者あり、夜其宅を襲  
ひ、父時國を殺しぬ、師、母に抱かれて竹間に隠れたりしが、  
小弓矢を執りて讐を射て、其の眉間に中てたり、然るに父、  
死に臨んで師を顧みて曰はく、怨を以て怨に對すれば、怨  
何の時にか息まん、汝決して我讐を報すること勿れ、唯佛  
道を成して自他の冥福を圖るべしと、出家の志蓋これよ



り起る。

是の歳冬、菩提寺の觀覺なる人、乞ふて弟子と爲し、佛經を授けしか、其の聰明なるに驚き、久安三年の春、師を件ふて叡山に到り、西塔の源光法師に屬しぬ、時に年十五、源光法師見て謂へらく、これ神器なり、吾が均治を受くべきの人にあらじとて、功德院皇圓法師の門に入らしめ、十一月祝髮受戒す。師、直ちに僧衆を辭して、竊かに跡を林藪に晦まし、專心に出離の行業を積まんことを求められしかと、皇圓法師の諫止により、その門に學を修むること三年、久安六年九月、其の指示によりて黒谷の叡空上人の門に入る。叡空の曰はく、少年の發心、事法然に出づと、因りて字を法然と呼ぶ、又源光叡空二師の名を取りて諱を源空となす、是より密教を稟承し、圓頓戒を傳へ、經論章疏内外の典

籍を博綜せり。

保元元年、師年二十四、熟謂へらく、教と機と相契はざれば修行其功無く、利生期し難し、何れの教門か最も時機に相應せるとて、諸山を歴訪して道を求め、法相の藏俊、三論の寬雅、華嚴の慶雅等の諸師を訪ひて其教義を諮かり、中川の實範上人に謁して具足戒を受けられたり。然れども尙ほ心に安んぜざるものありて、專心に道を求められしが偶々『往生要集』を讀んで往生之業念佛爲本の釋を得て大に悟る所あり、更に黒谷の報恩藏に入り、周覽五回善導大師の『觀經疏』を得て、廓然として妙旨を體得し、即ち所習の行業を捨て、專修念佛の淨業に歸せられたり。承安五年、師年四十三、遂に黒谷を出で、吉水に移り、此に大に念佛の門戸を張り、淨土の教義を闡揚せらる、これを

淨土宗の開始す、佛滅後一千六百五十四年皇紀千八百高祖降誕第三年西なり。これより道譽最も高く、朝野靡然として歸向せり、高倉天皇詔して宮中に入れ、自から菩薩戒を受け給ふに至る。

治承四年十二月東大寺兵火に罹るに及び、朝廷師に命じて再建の舉を企てしむ、師弟子重源を擧げて代らしむ、源の宋より歸るや工事未だ完からず、乃はち其將來せし所の淨土の變相、及五祖の畫像を廡間にかけて慶讚の式を行ひ、師を請ふて導師たらしむ、師淨土の三經を講せしむ、南都の學徒、師の名聲を嫉む者少なからず、頻りに論難を加へたれども、師の酬對甚だ痛快なりしかば、衆皆な慚謝その高德に服したりと云ふ。文治二年叡山の座主顯眞僧正、師に坂本に謁して出要を咨問す、師念佛を以て答へ

られたれども、明に其義を了せざる所やありけん、更に大原勝林院に來り、諸宗の碩德に會せられんことを乞ふ、師快諾す、期に至り會する者三百餘人、師坐に就て詳かに淨土の教義を述べ、二門の判を立て、諸師の質疑に應じ、辨拆甚だ明かなり、所謂大原問答即ち是なり、諸師其理義に服し、一宿を経て皆其意を得たり、諸師は悉く一代の名匠にして、徒らに辨難攻撃を弄するが如き者に非ず、眞個道を求めて相上下するもの豈勝敗を念はんや、此に於て顯眞座主先づ起て高く佛號を唱へ堂に入りて行道し、諸師皆是に和し、凡そ三日三夜にして散ず、諸師の襟懷また想ふべし。爾來諸宗の名師多く師の德に歸し、顯眞、靜嚴、慈圓、良快、明禪、公胤、明遍、靜遍、貞慶等の諸師、皆當代の英儁を以てして、師の教を稟け、顯眞坐主の如きは殊に五院を立て

不斷念佛を勸めたり。此の如くにして念佛門の勢威益々揚がりじが、かゝる新機運の常として、末徒眞意に達せざるの輩、動もすれば徒らに在來の舊宗を嘲罵し、且つ無戒の宗義を曲解して放恣に至らざる無きが如きものも少なからず、而して淨土門の興隆は自から聖道門の廢退を來たすの數なるより、類に南北學徒の嫉惡を被むるに至れり。元久元年十一月、三塔の大衆、山門大講堂に會し、念佛の禁止を座主顯眞僧正に訴へたり、師乃はち七條の誓誠を呈し、關白兼實公亦書を致して僅かに事止みたれど、元久二年に及びては有力なる南都貞慶の奏狀となり、南北相應じて攻撃の聲禁すべからず、會々後宮某等遁世の事あり、承元元年、朝議終に決し、師及門弟淨聞、禪光、好覺、法本、成覺、善信、善慧の七人

を流し、善綽、性願、住蓮、安樂の四人を斬る、三月十六日師京を出で、配所に就けり、兼實の好意を以て配地土佐國幡多を轉じて、其封邑讚岐國監飽に趣く、時に年七十五。門下大に其冤を悲しむ、師曰はくこれ化を海隅に布くの好機なるのみと。

是より先、元久元年兼實の請に應じて『選擇本願念佛集』を著はして淨土宗の教綱を張る、同二年四月十四日、之を我高祖に付屬せらる、本書付屬の事、淨土宗各派の最も重を置き由りて以て法統相承の正否を争ふ所なり、史家の異説また頗る多し。師の南海に去るや、高祖は北越に趣けり、而して終に再び相見へず。

師、配所に在るや、州民の歸仰甚だ盛なりしが、同年八月勅あり、配所より還りて攝津の勝尾寺に入り、建歷元年重ね

て勅あり、京都に歸らる。同二年一月疾あり、二十五日正午奄爾として寂す、年八十佛滅後千六百九十二年・西紀千二百十二年師、平生の行業頗る嚴峻、日課念佛七萬、建久九年一月より僅かに一ヶ月餘にして、『觀經』の前五觀法を成就し、常に佛身を感じせられき、持戒また甚だ堅固にして、帝者の戒師となり、各宗の碩徳また仰いて受戒せし者多かりしと云ふ、實に希世の名徳として、この一新機運を開く、後世の歸仰を専らにするもの、豈所以なからんや。

### 第三節 源空上人の教義

源空上人の教義

源空上人の著書にして本宗の所依とする者は、『選擇集』一部即ち是なり、この外漢文を用ゐる或は和文を用ゐられた

る數部の著書あり、收めて『漢語燈』『和語燈』に在り、これ等も亦學者の多く依用する所なり。『選擇集』は月輪禪定兼實の請により著はされたる者にして、浄土門の綱格念佛の悪義、全く此書によりて言明せられ、黒谷の肺腑此に盡されたり、且つ上人は既に天台を去りて、直ちに念佛の眞義を弘宣せられたれば、これを高祖の化風に比するときは尙ほ從容の態ありと雖も、また源信僧都の釋體に同じからず、二門二行の廢立の如き、直ちに聖道諸宗の根本義に逼るものありしかば、外には彼の華嚴の碩徳明惠上人の有力なる論難『摧邪輪』の出づるあり、内には往々邪見破徳の徒を生ぜし程なり故に、『選擇集』の授受は頗る其器を擇ばれ、親しく上人より授けられし者は、高弟僅かに數輩に過ぎざりしなり、後世此の書の授受を以て法統の正否